

『文化財と技術』

第10号

第一部 美術と技術の歴史

- 山中 理 美術史と金属工芸
 —唐時代銀器「鍍金狩獵文六花形銀杯」の周りを廻って—
- 金 跳 咏 原三国～三国時代における鉄製刀剣の製作技術とその意味
 吉田秀享 鍛冶作業場の推定 —二例の古代鍛冶炉から—
 上 梶 武 日本古代の鉄鑄造と素材鉄
 鈴木 勉 韓半島の鑄造技術と毛彫り技術から藤ノ木馬具・法隆寺へ
 金 跳 咏 三国時代における鉄鐸の副葬と性格
 平林大樹 根挟みを用いた後期・終末期古墳副葬矢の構造
 姜 旼 廷 益山・笠店里古墳出土金銅飾履の復元製作研究

第二部 象嵌研究

- 鈴木 勉・金 跳 咏 威安末伊山5号墳出土象嵌鉄刀の線彫り技術
 —線彫り技術判定の基準試料の提示—
- 瀧瀬芳之 日本列島内出土象嵌遺物集成2
 —刀剣・銚・刀子編（補遺・追加）及び馬具・鏡 他編—

第三部 金石文研究

- 福井卓造 七支刀銘の「為倭王旨造」について
 鈴木 勉 漧の技術・石刻の技術
 鈴木 勉 會津八一先生筆色紙「心」について

第四部 復元研究

- <宮地嶽古墳出土大型頭椎大刀の復元研究>
- 鈴木 勉 復元の企画
 鈴木 勉 復元のための調査と推定
 藤安将平 （作刀補助：有賀一久・中西裕也 記録：金 跳 咏）
 刀身の復元
 藤安将平 （記録：金 跳 咏）
 木製鞘の復元
 藤安将平 （記録：金 跳 咏）
 木製柄の復元
 山田 琢 金銅装の復元
 鈴木 勉 鑄造鈴の復元

三国時代における鉄鐸の副葬と性格

金 跳 咏

(慶北大学校人文学術院 HK 研究教授)

はじめに

三国時代の古墳から出土する鉄製遺物の一つに鉄鐸がある。扇形の鉄板の両辺を合わせて円錐形、または円筒形に成形し、内部に舌を垂下することで音を出せるようにした鉄製鈴である。2000年代以前の韓半島での出土例は嶺南地方に偏在していたが、最近では中西部地域まで出土範囲と数が増加している。本稿では、これまでに日韓で出土した鉄鐸を分析し、その意味について考える。

論旨の構成は以下の通りである。まず、I章で研究史を検討し、既往の鉄鐸研究の問題点を指摘する。II章では、現在までに報告された鉄鐸を悉皆的に集成し、これを基にして鉄鐸の登場および消滅の時期、段階設定、製作技術、展開過程などを整理する。III章で、副葬様相、共伴遺物を検討し、鉄鐸の用途と所有者の性格について再検討する。IV章では、II～III章の分析結果に基づき、三国時代鉄鐸のもつ歴史的・考古学的意味について述べる。最後にV章で、日本列島から出土した鉄鐸の在り方を整理し、日韓交渉という観点から鉄鐸がもつ意味について考察する。なお、本稿で使用する鉄鐸の細部名称は図1に従う。

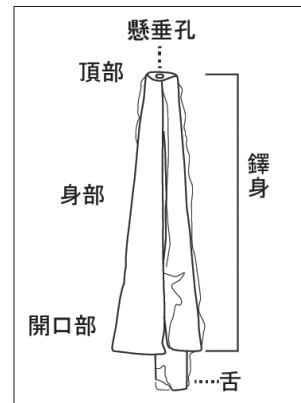


図1 鉄鐸の細部名称

I. 研究史の検討と問題提起

1. 研究史の検討

鉄鐸に関する研究史を年度順に概観する。

1980年代初頭まで、鉄鐸はその存在が認識されていなかった。そのため、鉄鐸はその形が類似している鉄鈴（沈奉謹 1977）、あるいは異形鉄器として報告された（釜山直轄市立博物館 1983）。鉄鐸が正しく認識・紹介されるようになるのは陝川苧浦里遺跡の発掘報告書からである。苧浦里 E-5-1 号墳から出土した鉄鐸の構造を観察した報告者が、「頂部中央の懸垂孔に紐を通して人が携帯できるようにし、移動する際に音が鳴るようにした鉄鐸」と報告したのである（釜山大学校博物館 1987）。同年、陝川倉里遺跡報告書でも鉄鐸が「鉄製鈴」として紹介され、内部に舌をぶら下げて音を出すための牛馬用の道具とされた（東亜大学校博物館 1987）。さらに、安東枝洞 2 号墳から鉄鐸とともに金銅冠が出土し、その被葬者は政治的ないし信仰に関わる権威をもった人物と推定された（慶北大学校博物館 1989）。

その後、尹容鎮・朴淳發は、鉄鐸が出土した慶州新院里 2 号墳の被葬者の性格を共伴遺物から推定した。当時までに報告されていた資料を集成し、鉄鐸に金銅冠、鍛冶具と共伴する事例が多いことを根拠に、鉄鐸の所有者を宗教的に特殊な身分の人物、または鉄を扱う工人と判断した（尹容鎮・朴淳發 1991）。安東坪八洞 1 号墳から出土した鉄鐸の性格に関しては、儀器とみる見解も提示された（裴漢極・朴普鉉・朴光烈 1992）。

鉄鐸の基礎的な整理は、清道尊池里遺跡の報告書でおこなわれた（大邱教育大学校博物館 1994）。報告者は、嶺南地方出土の鉄鐸を 3 型式に分け、型式別に機能を推定した。さらに、慶州新院里 2 号墳の事例を参考に、鉄鐸所有者を村社会内の豪民層あるいは土豪層と推断した。

一方、洪潛植は鉄鐸が埋納された時期幅を 6 世紀中頃から 7 世紀後葉までと判断し、先行研究を参照しつつ、鉄鐸が巫俗具としての機能をもつものである可能性が高いと考えた。また、被葬者についても巫俗にまつわる役割を担当した人物と推定した（洪潛植 1995）。

このように、1990 年代までは鉄鐸の出土事例が少なかったため、鉄鐸に関する研究は、単行本の一部や報告書の考察で断片的にその性格を推論する程度にとどまっていた。そうした中、出土した鉄鐸を改めて集成し、出現時期や盛行時期、分布範囲、製作方法、共伴遺物、鉄鐸所持者の性格などを総合的に検討した金東淑の研究は注目に値する（金東淑 2000）。後の論文では、鉄鐸が紡錘車や退行形の冠と共伴する点、腰の辺りから出土する点から、被葬者は女性であり、鉄鐸は宗教職能者であるシャーマン巫俗具であると推定した。その上で、6 世紀前半まではその分布範囲がほぼ新羅領域に限定されるが、6 世紀中頃には加耶地域まで拡大することから、新羅領域の拡大過程の産物として鉄鐸を理解した（金東淑 2016）。

金在弘は、新羅の村の宗教的な祭儀に関わる資料として鉄鐸と金銅冠に注目した。鉄鐸が金銅冠や帯金具、耳飾、鉄鈴と共伴することから、所持者は宗教的な権威者であり、仏教より土着の伝統的な信仰に近い存在と判断した（金在弘 2001）。一方、金龍星は新羅の古い石室に副葬された鉄鐸を分析し、これを麻立干期の有刺利器が変わったものとした上で、葬送行列に用いられた遺物と判断した（김용성 2016）。そのほかにも、多くの発掘報告書の考察で鉄鐸を有する被葬者の性格に関する検討がおこなわれている（金銀珠 2006、聖林文化財研究院 2010、김민철 2012、최대용 2013、박영협 2015、이미정 2016）。

このように、三国時代における鉄鐸に関する研究は、主にこれを所有した被葬者の性格の検討に集中していた。共伴した金銅冠や鍛冶具は、鉄鐸とともに被葬者の性格を推察する上で大きな根拠とされた。

日本の考古学界も、早くから鉄鐸に注目していた。韓国よりずっと早く、1960 年代から鉄鐸が報告されていたためである。その数は韓半島より少ないが、日本列島の全域に分布する点は韓半島と対照的である。

鉄鐸に関する先駆的な研究は、大場磐雄や藤森栄一によって試みられた。しかし、検討の対象が長野県を中心とした伝世品であった点に限界があった（大場磐雄 1972、藤森栄一 1974）。その後、行田裕美が西吉田北遺跡の報告書の中で、韓国と日本から出土した鉄鐸を集成し、その存続時期と分布に言及した。行田は、鉄鐸の大きさ、舌の形態や付着方法などを整理した上で、古墳時代の鉄鐸が韓半島から鍛冶具とともに搬入されたと考えた。用途に関しては、音を出す道具であるため、祭祀に使用されたものと推定した（行田裕美 1997）。

一方、村上恭通は、鉄鐸が加耶地域に主に分布し、鍛冶具が共伴することから、日本列島の鍛冶技術者の出自と系譜を考える上で重要な遺物と評価した（村上恭通 2004）。さらに、古墳時代における鉄鐸の基礎的な整理と総合的な研究が早野浩二によって試みられた。早野は、祭祀具としての鉄鐸が所有・副葬された背景には鉄鍛冶集団との関係があり、地域性が反映されている可能性が高いと考えた。さらに、鉄鐸が韓半島と日本列島から出土する儀礼的器物であるため、両地域の儀礼思想が共有され、複雑化していく地域的・歴史的な展開が反映されていると指摘した（早野浩二 2008）。

以上の研究成果を踏まえて、高慶秀は日韓出土鉄鐸の研究傾向を整理した。その上で、日本の鉄鐸や小型の鉄製農耕具研究は、鉄器生産をめぐる韓半島との交渉関係を念頭に置きつつ歴史的・地域的展開を考慮しなければならないと強調した(高慶秀 2009)。また、川崎保は、古墳時代から中世までの鉄鐸を分析し、その変遷過程や被葬者の性格を整理した。特に、平安時代に信濃地域に鉄鐸が集中する理由として、鉄鐸が狩猟具に関連する祭祀具であり、祭祀の風習が当該地域にだけ残っていたためと推測した(川崎保 2015)。

最近、寺井誠は韓半島と日本列島で出土した鉄鐸の形態と地域ごとの時期的変遷を簡明に整理した。韓半島から日本列島へ伝わったプロセスについて、洛東江東岸から日本列島に搬入された鉄鐸が列島内で保有されたと推論した(寺井誠 2018)。後の論考では、改めて韓半島出土の鉄鐸を集成した上で、分類、変遷、出土状況および共伴遺物を検討し、比較史的な観点から日本列島で出土した鉄鐸を新羅と関わるものと理解した(寺井誠 2019)。

以上のように、日本列島の鉄鐸が韓半島と関連した鉄製品であるという点は多くの研究者が認めている。ただ、鉄鐸の故地ともいえる韓半島の資料については、最近発表された寺井誠の研究以外には、基本的な集成に基づいて製作技術、編年、意味など総合的な分析が進められたとは言い難い。

2. 問題提起

以上の研究史の検討からいくつかの問題を提起したい。

まず、現在までに報告された鉄鐸を徹底的に整理する必要がある。2000年代以降、急増したすべての鉄鐸を集成し、体系的に分析した研究は未だみられない。おそらく、資料の集成が困難なためであろう。鉄鐸は各報告書で1、2点ずつ報告される場合がほとんどであるため、現在まで報告されたすべての鉄鐸を遺漏なく集成する作業は決して容易ではない。

次に、鉄鐸に対する総合的な研究が必要である。徹底的に集成した資料をもとに鉄鐸の登場と消滅時期、展開過程、分布、製作技術、副葬位置、共伴遺物、埋葬施設など様々な事実関係を整理する必要がある。信仰・宗教的な権威者や鍛冶職人のように、これまでやや漠然と想定されてきた鉄鐸所有者の性格、そして鉄鐸の歴史的意味も、こうした綿密な検討結果をもとに推論しなければならないであろう。

最後に、日本列島で出土した鉄鐸に注目する必要がある。研究史の検討で確認したように、古墳時代の鉄鐸は韓半島と深く関連している。韓半島三国時代における鉄鐸の意味を解明することができれば、日本列島古墳時代の鉄鐸の意味を日韓交渉という観点から再解釈することができるだろう。

II. 三国時代鉄鐸の分析

これまでに韓半島で出土した三国時代の鑄造・鍛造鉄鐸は、297ヶ所の遺構から788点が確認されている。本章では鉄鐸に関する基本的な分析をおこなう。

1. 鉄鐸の出現と消滅

まず、存続時期から検討する。鉄鐸は形態が比較的単純であるため、型式分類によって段階を設定したり、年代を比定したりすることは難しい(洪潜植 1995:162)。したがって、共伴する土器を参考に登場時期と消滅時期を推定するのが、現状としては最善の方法と考える。

これまでの研究で、鉄鐸は嶺南地方を中心に6世紀以降に増加することが知られている(洪潜植 1995、金東淑 2000)。しかし最近、5世紀代まで遡るとみられる土器と共伴する鉄鐸が、大邱、蔚山、

清道、密陽など、嶺南地方を中心に増加している。いわゆる洛東江以東様式土器、あるいは新羅土器と呼ばれるこれらの土器の年代観に関しては、研究者ごとに見解の違いが大きいため、共伴する鉄鐸の製作年代を確定することは容易ではない。ただ、図2-I~IVに提示した土器の製作年代に

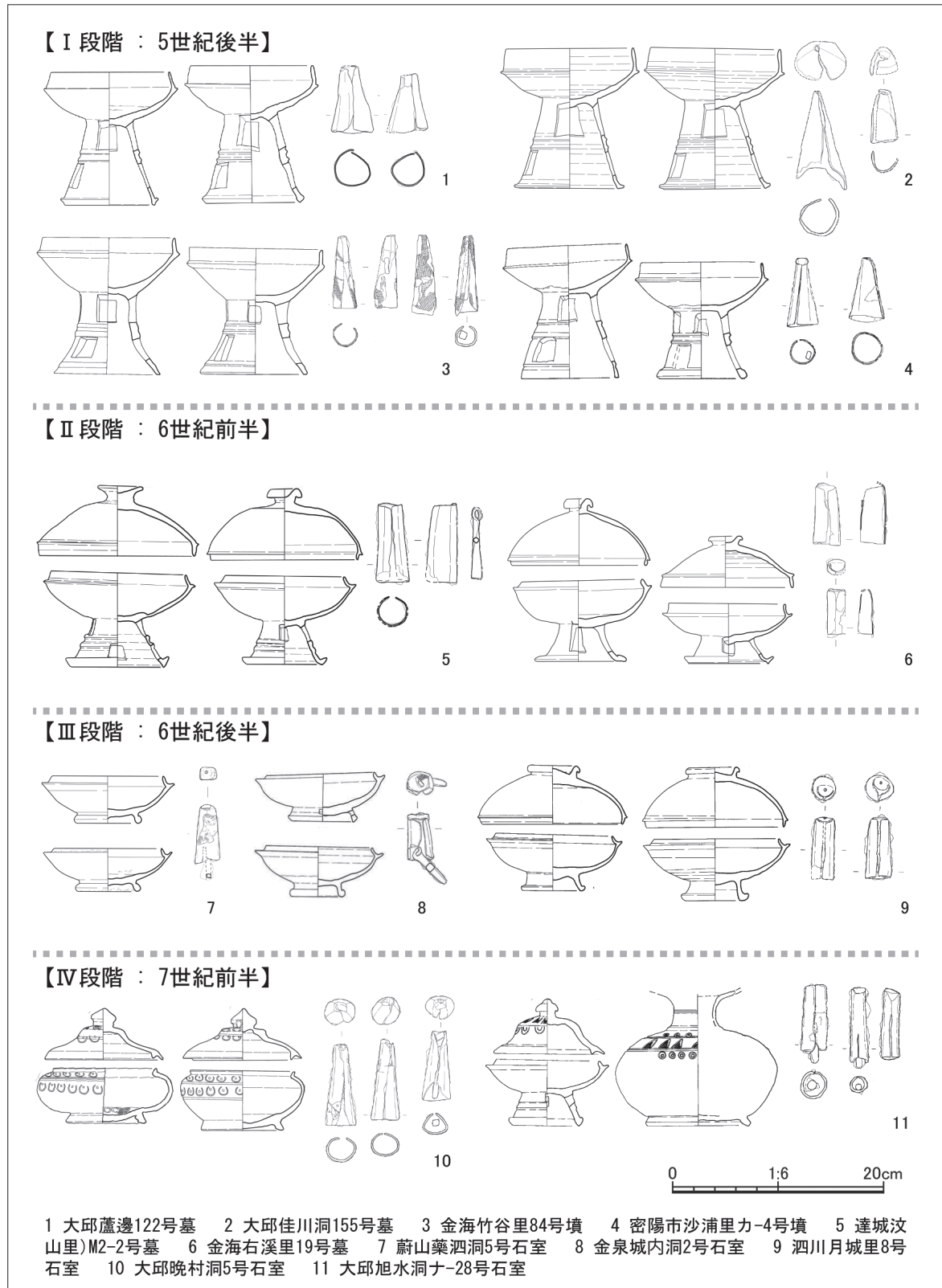


図2 段階設定

については、多くの研究者が5世紀中葉から後葉に比定していることを考慮すれば、すでに指摘されているように、鉄鐸は5世紀後半に嶺南地方で出現した可能性が高い(김민철 2012:438、寺井誠 2019:13)。

鉄鐸の消滅時期に関しては、大邱晩村洞5号横穴式石室出土品が参考になる(図2-10)。同石室からは、3点の鉄鐸とともに印花紋が刻まれた有蓋盒が2セット出土しており、現在までに鉄鐸と共伴した土器の中で最も新しい型式に当たる。蓋身部と胴体部には横方向に2条の半円点文が施文されており、その型式と文様は7世紀前半の中期様式土器Ⅲa期(윤상덕 2010)や後期様式土器2c期(최병현 2011)の資料、あるいは7世紀後半の統一様式土器第Ⅰ様式(洪潛植 2001)の資料と類似する。鉄鐸は被葬者の右腰に着用されており、足元に副葬した印花紋土器が屍床の下に転げ落ちたとする報告書の推定(聖林文化財研究院 2010:42)が妥当であれば、追葬は認め難い。鉄鐸の製作時期と印花紋土器の製作時期に大きな隔たりはないとすれば、遅くとも7世紀前半までは鉄鐸の製作が続いていたと判断できる。

このほかに、大邱旭水洞ナ-28号石室から出土した土器も、鉄鐸の存続年代を推定する上である程度参考となる(図2-11)。少なくとも一度は追葬されたことが確認できるため、細かい位置づけは難しいが、鉄鐸の近くから一緒に出土した偏球形瓶と蓋は新羅後期様式土器2c(최병현 2011)、あるいは中期様式Ⅲa(윤상덕 2010)に比定できる。土器とともに鉄鐸が埋葬されたと考えるなら、その製作時期は7世紀前半を大きく遡らないだろう。

以上、共伴した新羅土器と鉄鐸の製作および副葬年代が一致するという仮定が妥当であれば、三国時代鉄鐸は5世紀後半から7世紀前半までの約200年間製作・使用されたと考えられる¹。なお、新羅土器の年代観が変動すると、鉄鐸の登場および消滅時期も流動する点も明記しておく。

2. 段階設定

新羅土器の年代観(윤상덕 2010、최병현 2011)を参考に、約200年間続いた鉄鐸に、5世紀後半(Ⅰ段階)、6世紀前半(Ⅱ段階)、6世紀後半(Ⅲ段階)、7世紀前半(Ⅳ段階)の四つの段階を設ける(図2)。

3. 製作技術

鉄鐸は、製作方法を基準に、大きく鍛造製と鑄造製とに分けられる(金東淑 2000)。まず、鍛造製鉄鐸の分析を試みる。

1) 鐸身

鍛造製鉄鐸は、鐸身部を仕上げる前に鉄板を裁断する方法と、鐸身部を成形する方法を基準に、以下のようにA式、B式、C式に分類する(図3-上)。

▪ A式：鉄板の上部を一部残して切り取り、残した部分を90度折り曲げて頂部をつくった後、鉄板の下部を筒状に成形して完成した鉄鐸。鉄板の平面形態によってA1式とA2式に細分できる。

A1式：平面長方形の鉄板を円筒形に成形するもの。頂部の形態は円形、半円形、三角形、方形など、多様である

A2式：平面梯形の鉄板を円錐形に成形するもの

1 嶺南地方に限った場合である。後述するように、近年、3～4世紀代の大型鉄鐸が中西部地域を中心に増加している。

- B式：平面梯形の鉄板を円錐形に成形するが、A2式と異なり、90度折り曲げてつくる頂部をもたないもの
- C式：平面長方形の鉄板を半分に折り曲げてつくったもの

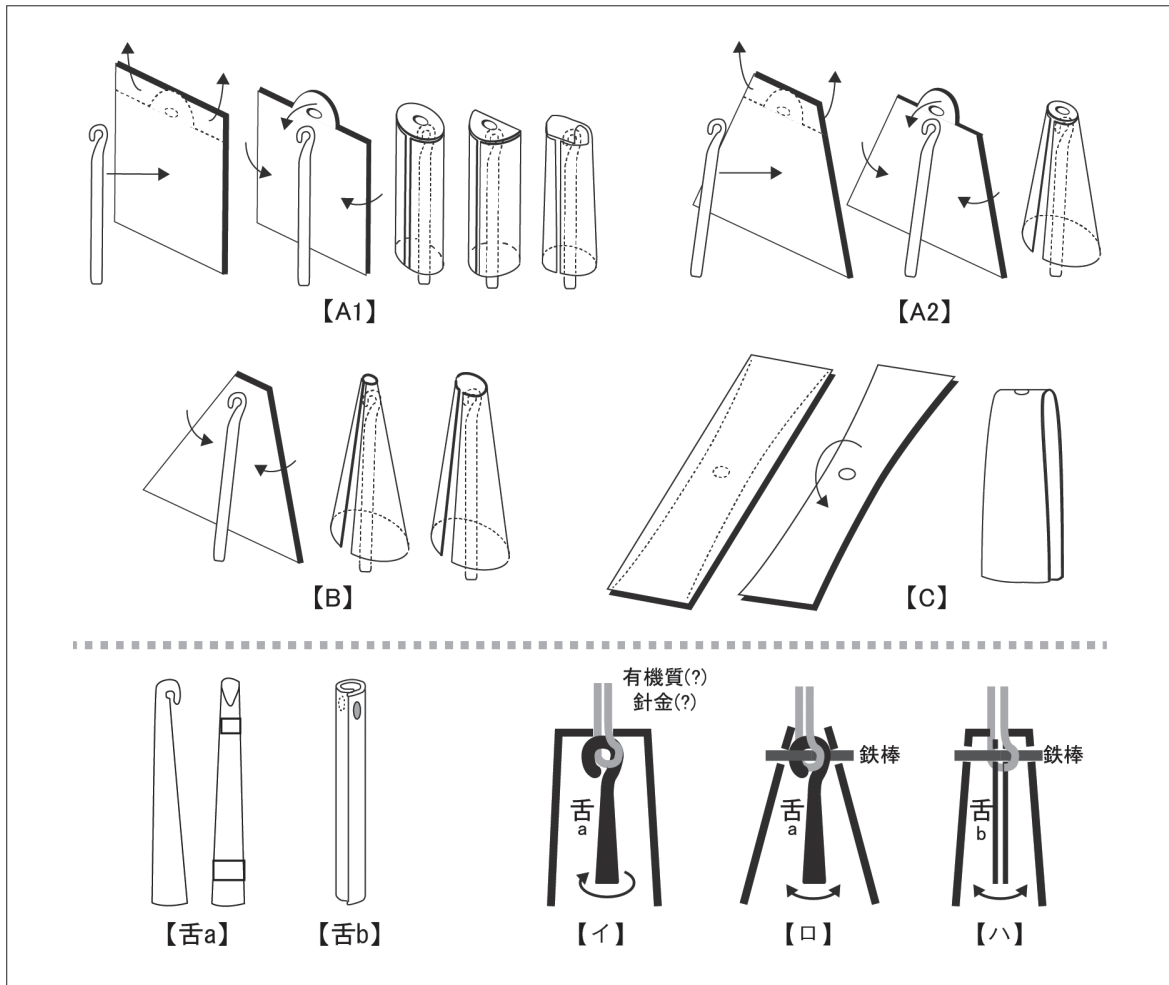


図3 鍛造製鉄鐸の製作方法

2) 全長

鉄鐸は土中に埋没しているうちに鐸身の一部が欠損し、本来の全長を推定することが難しい事例が多い。残存状態が良好で、全長が明らかな鍛造製鉄鐸は、I段階119点、II段階247点、III段階96点、IV段階9点で、全788点の鉄鐸のうち471点である²。

分析の結果、I段階の鉄鐸の平均全長は6.86cm、II段階の鉄鐸の平均全長は6.57cm、III段階の鉄鐸の平均全長は6.88cm、IV段階の鉄鐸の平均全長は7cmであった(図4)。各段階に例外的な大きさの鉄鐸が十数点ずつ存在するが、全体的に鉄鐸の全長に大きな変化があったとは認めにくい。これまでに指摘されている6世紀代の鉄鐸(II～III段階)が徐々に小型化する現象(寺井誠2019:21)は、明確には確認できない。

2 全長は判明しているものの、段階を設定できない鉄鐸は63点である。

3) 舌の製作および取り付け方法

舌は欠失している事例が多く、詳しい分析は不可能である。現在確認されている資料を中心に製作方法と取り付け方法を細分すれば、以下ようになる(図3-下)。

■ 舌の製作方法

舌 a : 断面円形ないし方形の鉄棒でつくった舌である。ぶら下げられるよう、端部を鉤のように曲げる。ほとんどの舌がこの方法で製作される。

舌 b : 鉄板を円筒形に成形してつくった舌である。

■ 鐸身への舌の取り付け方法

イ : 舌 a に有機質製の紐または針金をつなぎ、鐸

身内に結びつける方法である。鐸身に穴が開いていない鉄鐸のほとんどはこの方法によって舌を取り付けたと考えられる。最も音がよく出る仕組みである。陝川倉里 B-26 号墳出土品を代表例とし、主に A 1・A 2 式で確認される。

ロ : 舌 a を鐸身の内部に横方向に設置した鉄棒に掛けて取り付け方法である。前後に動く舌が鐸身とぶつかって音が出る仕組みである。大邱達成汶山里 3-2 号墓、密陽新安 21 号墳、蔚珍徳川里 II 区域 4 地点 120 号墓、蔚山早日里 34 号墓出土品に代表され、主に B 式で確認される。

ハ : 舌 b の上端に穴を開けた後、鐸身内部に横方向に設置した鉄棒に掛けて取り付け方法である。大邱佳川洞 69 号墓出土品を典型例とする。舌を前後に動かすことで鐸身にぶつけて音を出す仕組みである。

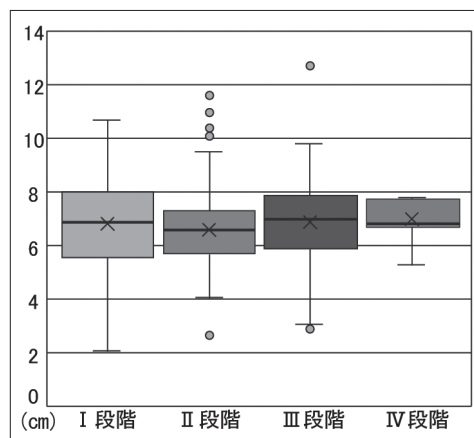


図4 段階別鍛造製鉄鐸の全長

4. 展開

各段階の鉄鐸が型式ごとにどのような分布を示すのかを整理したのが(図5)である。土器が共伴しないため、時期が特定できない鉄鐸については、別に整理した(図6)。

1) I 段階(5世紀後半)

186 点の鉄鐸が確認される。このうちの 107 点が大邱で出土しており圧倒的な集中をみせる。このほか、蔚山で 26 点、清道で 13 点、密陽で 8 点、漆谷で 5 点と、洛東江以東地域に集中的に鉄鐸が分布する。琴湖江以北では漆谷以外に鉄鐸は見つかっていないが、蔚珍から 2 点が出土しており、注目される。

型式別の出土点数は、A 1・A 2 式が 97 点、B 式が 65 点、C 式が 5 点と、すべての型式が確認され、型式不明の鉄鐸は 16 点である。したがって、この時期に出土する鉄鐸はほとんど B 式で、6 世紀になると A 1・A 2 式が急増するという見解(寺井誠 2019:13)には再考の余地がある。

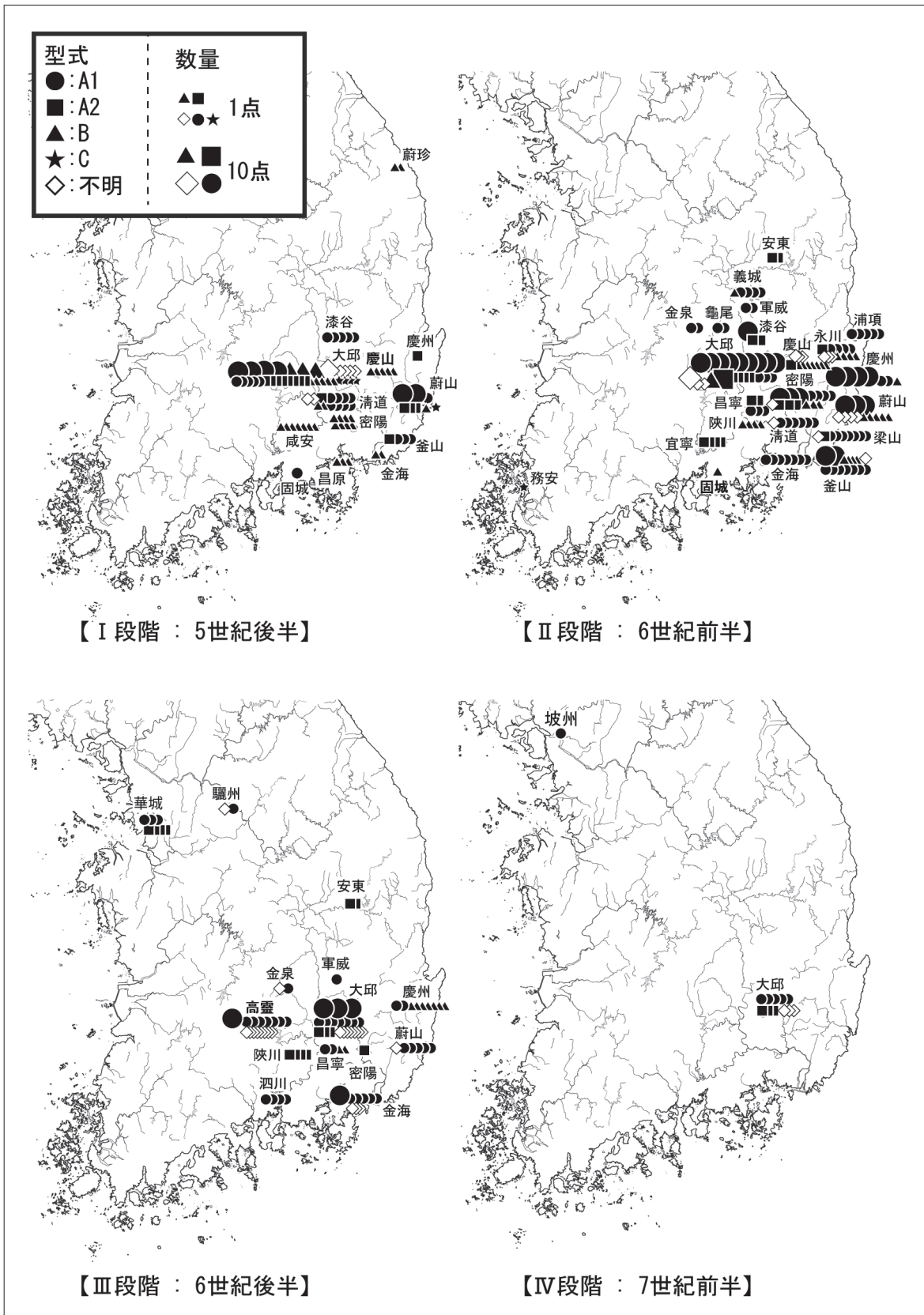


図5 鍛造製鉄鐔の展開

2) II段階（6世紀前半）

375点がこの時期の資料に該当し、鉄鐸が最も活発に製作された時期と評価することができる。大邱で129点が出土しているほか、慶州で43点、密陽で41点、蔚山で39点、釜山で32点、永川で12点、慶山で11点、清道で7点、義城で5点、浦項で5点が確認される。洛東江以東地域の古墳から主に確認されるが、やはり大邱での出土の割合が高い。基本的にはI段階と同様の様相が続く。洛東江以東地域以外にも、金泉、亀尾、漆谷、軍威、義城、安東などの慶北北部地域や、陝川、宜寧、金海など洛東江以西地域でも鉄鐸が出土しており、I段階に比べて鉄鐸の分布範囲が拡大している。

鉄鐸の型式はA1・A2式が301点、B式が41点、C式が1点で、型式不明の鉄鐸は26点である。A1・A2式の比率が圧倒的であり、B式とC式はI段階に比べて減少する。

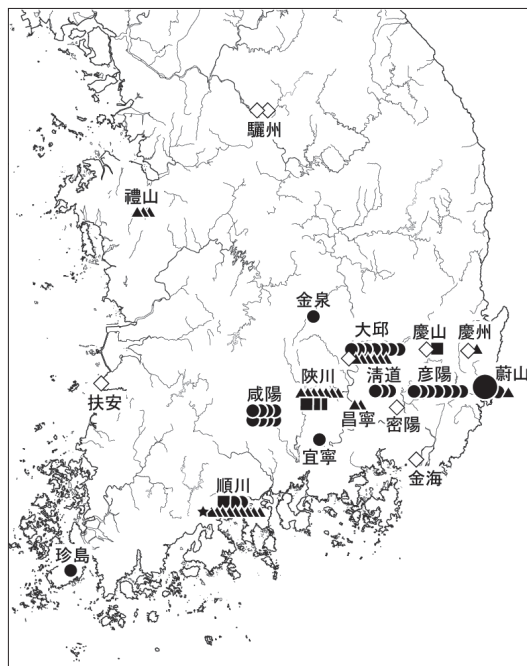


図6 時期が特定できない鉄鐸の分布

3) III段階（6世紀後半）

135点の鉄鐸が確認され、II段階よりも出土数が減少する。

出土が集中しているのは、大邱の47点、高霊の25点、金海の18点、慶州の9点などで、大邱での出土比率が高いのは前段階と同様である。このほか華城の7点、驪州の2点など、京畿道でも鉄鐸が出土しはじめる。一方、土器が共伴しないため時期を特定できない鉄鐸（図6）のうち、禮山、驪州から出土した鉄鐸は、分布範囲からみてこの段階に属する可能性が高い。

鉄鐸の型式はA1・A2式が105点、B式が9点で、C式は認められない。型式不明の鉄鐸は21点である。A1・A2式の比率が圧倒的に高い。

4) IV段階（7世紀前半）

12点の鉄鐸が確認され、III段階から出土数が急減し、それ以降の韓半島では鉄鐸が製作されなくなる。うち11点が大邱での出土で、京畿道坡州からも1点出土した。型式不明の鉄鐸3点を除いた残り9点はいずれもA1・A2式であり、B・C式は認められない。

以上のように、I段階からIV段階までを通して、鉄鐸の分布は大邱に集中している。報告された788点のうち、実に308点が大邱で出土した鉄鐸である。三国時代において、鉄鐸が最も早くから製作され、使用されたのは大邱地域であったとみて差し支えない。5世紀後半、大邱を中心に登場した鉄鐸が、6世紀以降、嶺南地方を越えて中部地方まで拡散されたとみられる。

鉄鐸の型式は、I段階においてはA1・A2式、B式、C式のすべての型式が確認される。しかし、II・III段階になると徐々にA1・A2式の比率が増え、最後のIV段階にはA1・A2式だけが残るようになる。三国時代に最も活発に製作された鉄鐸の型式はA1・A2式といえよう。

5. 鑄造製鉄鐸

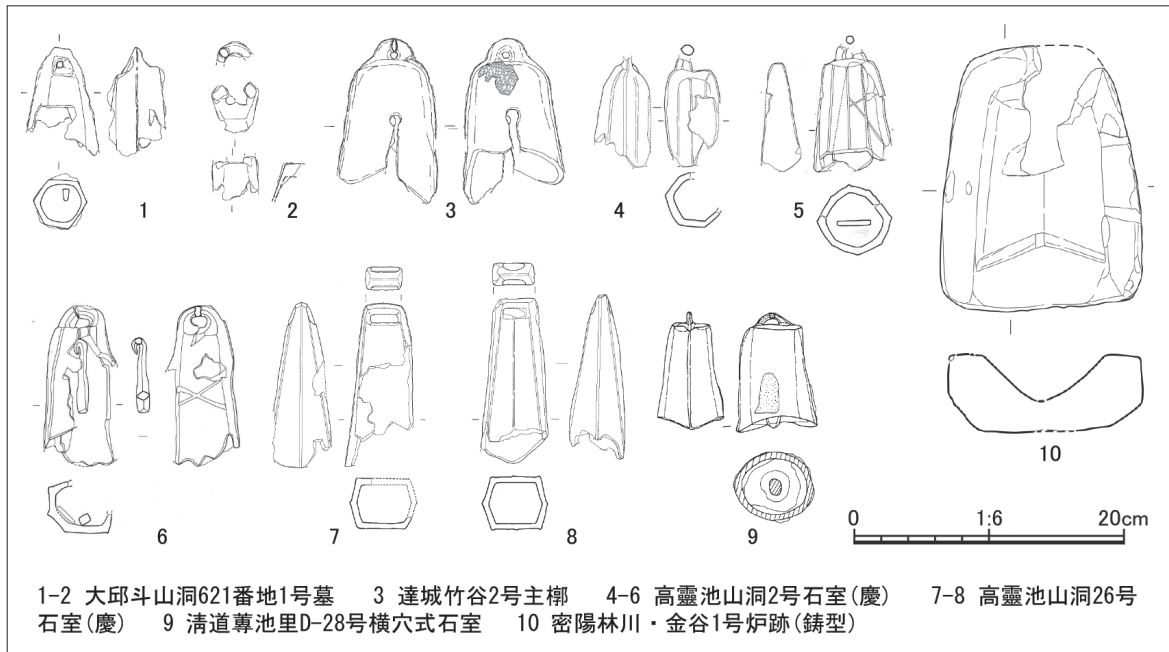
三国時代の鑄造製鉄鐸はこれまでに計9点が報告されている(表1、図7)。出土事例が少ないため詳細な分析は難しいが、Ⅰ段階からⅢ段階まで出土しており、開口部の形態を基準に、角張ったものとそうでないものとに二分できるようである。鍛造製鉄鐸と共伴した事例は、高霊池山洞2号(慶)石室が唯一である。

一方、製作と関連して、密陽林川・金谷1号炉跡から出土した鉄鐸の鑄型2点(図7-10)が注目される。遺物の整理作業中に見つかったため出土の脈絡は不明であるが、鑄型の大きさからみて、現地で大型の鑄造製鉄鐸が生産された可能性が非常に高い。

地域	古墳	遺構	鉄鐸	段階	全長	有機質	出土位置	鎌	有	紡	金	鉄	銅	鍛
大邱	斗山洞 621 番地	1号	竪穴	1	Ⅱ段階	8.1	—	北長壁	—	—	○	—	—	—
				2		—	—	北長壁	—	—	—	—	—	
	達城竹谷里	封土墳 2号	竪穴	1	Ⅰ段階	12.6	○	南短壁	—	—	—	○	—	—
高霊	池山洞	2号(慶)	横穴	1	Ⅲ段階	—	○	北短壁	—	—	—	○	—	—
				2		—	○	北短壁	—	—	—	○	—	
				3		—	○	北短壁	—	—	—	—	—	
		26号(慶)	横穴	1	Ⅲ段階	—	—	南短壁	—	—	○	—	—	—
				2		—	—	南短壁	—	—	—	—	—	
清道	蓴池里D地区	28号	横穴	1	Ⅱ段階	8.8	○	—	—	—	—	—	—	

【凡例】横穴：横穴式石室，横口：横口式石室，竪穴：竪穴式石槨，鎌：鎌形鉄器，有：有刺利器，紡：紡錘車，金：金銅冠，鉄：鉄(青銅)鈴，銅：銅鐸，鍛：鍛治具

表1 三国時代の鑄造製鉄鐸



1-2 大邱斗山洞621番地1号墓 3 達城竹谷2号主槨 4-6 高霊池山洞2号石室(慶) 7-8 高霊池山洞26号石室(慶) 9 清道蓴池里D-28号横穴式石室 10 密陽林川・金谷1号炉跡(鑄型)

図7 三国時代の鑄造製鉄鐸

Ⅲ. 鉄鐸の用途と所有者の性格

I章で検討したように、鉄鐸およびその所有者の性格に関しては、シベリア巫女の衣服を参考に、信仰・宗教的な権威者とする見解や、共伴する鍛冶具に注目して製鉄・鍛冶工人とする見解、金銅冠に注目して政治的な、あるいは信仰上の権威をもつ人物と推定する見解が提唱されている。また、紡錘車が共伴する事例が多いことから、ほとんどの被葬者は女性と考えられている。ただ、鉄鐸の出土資料数が急増した現在、鉄鐸所有者がいずれも同一の性格をもつ人物であると規定できるかについては再検討の余地がある。Ⅲ章では副葬様相、共伴遺物を検討し、鉄鐸の用途と所有者の性格について改めて検討してみたい。

1. 副葬様相

1) 埋葬施設

これまで鉄鐸は、主に横口式・横穴式石室に副葬されるものとされてきた(洪濬植 1995)。しかし、現在までに報告された 788 点の鉄鐸のうち、横口式石室と横穴式石室から出土した鉄鐸はそれぞれ 180 点、116 点に限られる。むしろ、竪穴式石槨からの出土数が 461 点に上っており、最も高い出土比率を占めるのは竪穴式石槨である。このほかにも、土壙墓から 5 点、木槨墓から 32 点、積石木槨墓から 23 点、横口式石槨から 18 点と、多様な埋葬施設に鉄鐸が副葬されたことがわかる。また、達城汶陽里 M2、M3、M4 号墳のように墳丘の直径が 10m を上回る大型墳から鉄鐸が出土する場合もあるが、大半は小型墳に限定される。

一方、時至地区生活遺跡 4 G-3 号竪穴遺構、珍島五山里ナ-11 号住居、扶安竹幕洞祭祀遺跡出土品を除いて、鉄鐸はいずれも墓から出土しており、基本的に古墳に埋納する副葬専用品としての性格をもつ(寺井誠 2019:27)。

2) 副葬位置

鉄鐸の性格を推定する上で、参考となるのが鉄鐸の副葬位置である。民族誌の事例から、石室の中央部から出土した鉄鐸は被葬者が腰に装着したものであった可能性が高いとした上で、専門シャーマンが所有・使用したものとする見解が提起されたためである(金東淑 2000:286)。

分析の結果、埋葬主体部の中央部あるいは屍床台から出土した鉄鐸、さらには、軍威雲山里 3 号石槨墓鉄鐸のように人骨の周辺で検出され、実際に被葬者が装着したとみられる鉄鐸が約 220 点確認された。現在までに報告された鉄鐸全体の 4 分の 1 ほどに当たる。残りの 4 分の 3 は玄室の床や石槨の短壁、主槨内の足元または頭部付近から出土したものや、大邱盧邊洞 407 号墓、昌寧榮山 3 号墓のように土器の中に入れられた状態で出土したものである。したがって、すべての鉄鐸が被葬者に装着されていたとはみなしがたい。遺骸に装着された鉄鐸もあったが、そうでない事例の方が多かったとみられる(図 8)。

3) 有機質の痕跡

鉄鐸の性格推定に際し、次に参考にできるのが鐸身部に遺存する有機質の痕跡である。鉄鐸を布や革などの有機質素材で覆って副葬した事例があり、副葬位置と同様に被葬者が専門シャーマンである可能性の根拠とされている(金東淑 2000:289)。

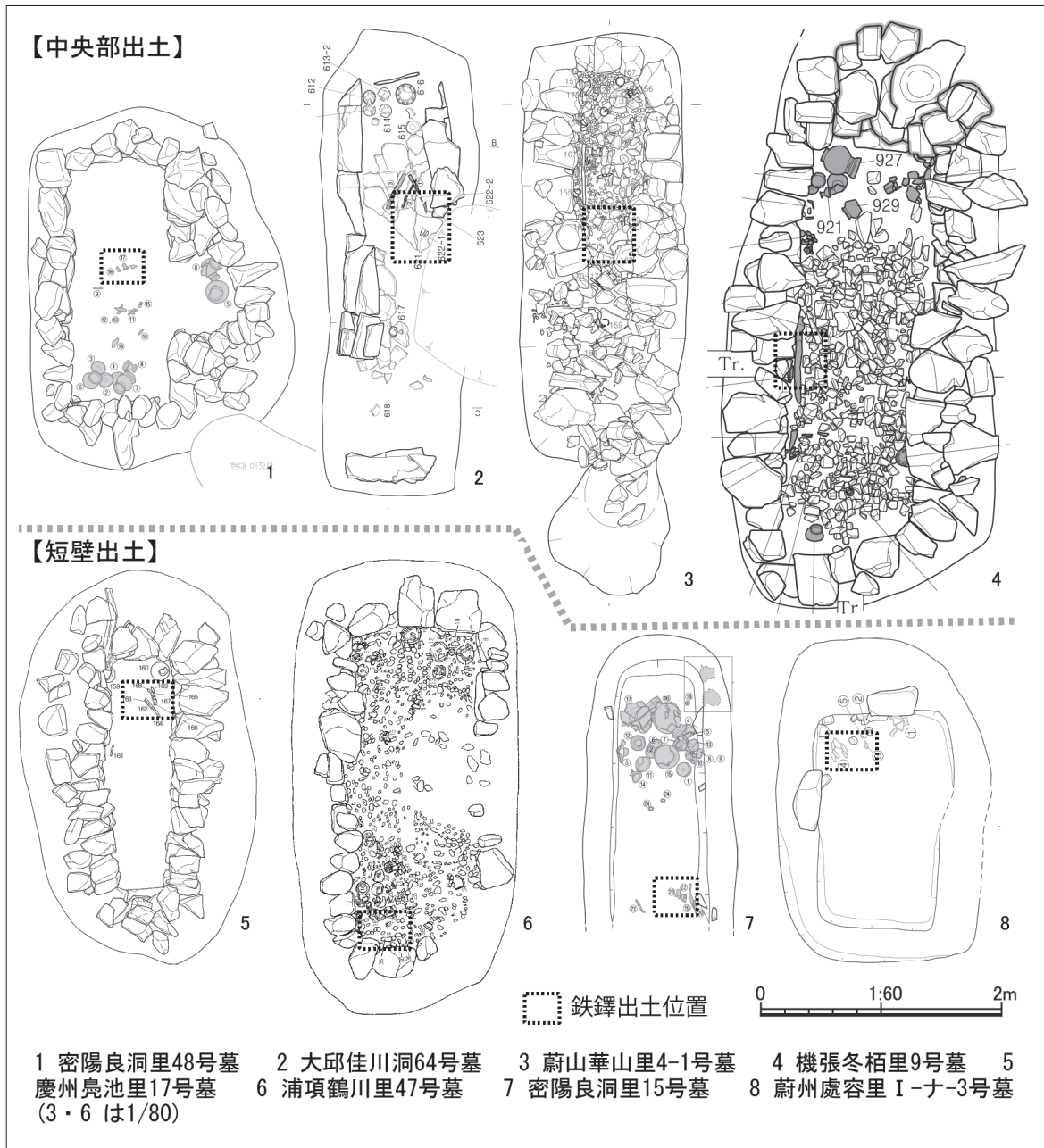


図8 鉄鐸の副葬位置

分析の結果、788点のうち、布や革、草本類などの有機質が身部に残存する事例はI段階に49点、II段階に88点、III段階に26点、IV段階に1点、時期不明のものが20点、計184点に留まった(図9)。もちろん、元来は布や革で鉄鐸を覆ってあったが表面に有機質の痕跡が残らなかった可能性もあるが、すべての鉄鐸から有機質痕跡が観察されるという従来の見解は、資料数が急増した現在では認め難い。有機質素材で覆って埋納した鉄鐸より、そうしない鉄鐸の方が多かったと考える。

4) 魚網錘

鉄鐸と魚網錘の相伴関係を根拠に、被葬者の性別を女性とみる見解がある。現在までに知られている魚網錘と鉄鐸の相伴遺構は計66ヶ所で、全体遺構数の22%に当たる。実際、鉄鐸と魚網錘が相伴した遺構の被葬者の性別が女性で、残りの78%の被葬者が男性である可能性ももちろんあ

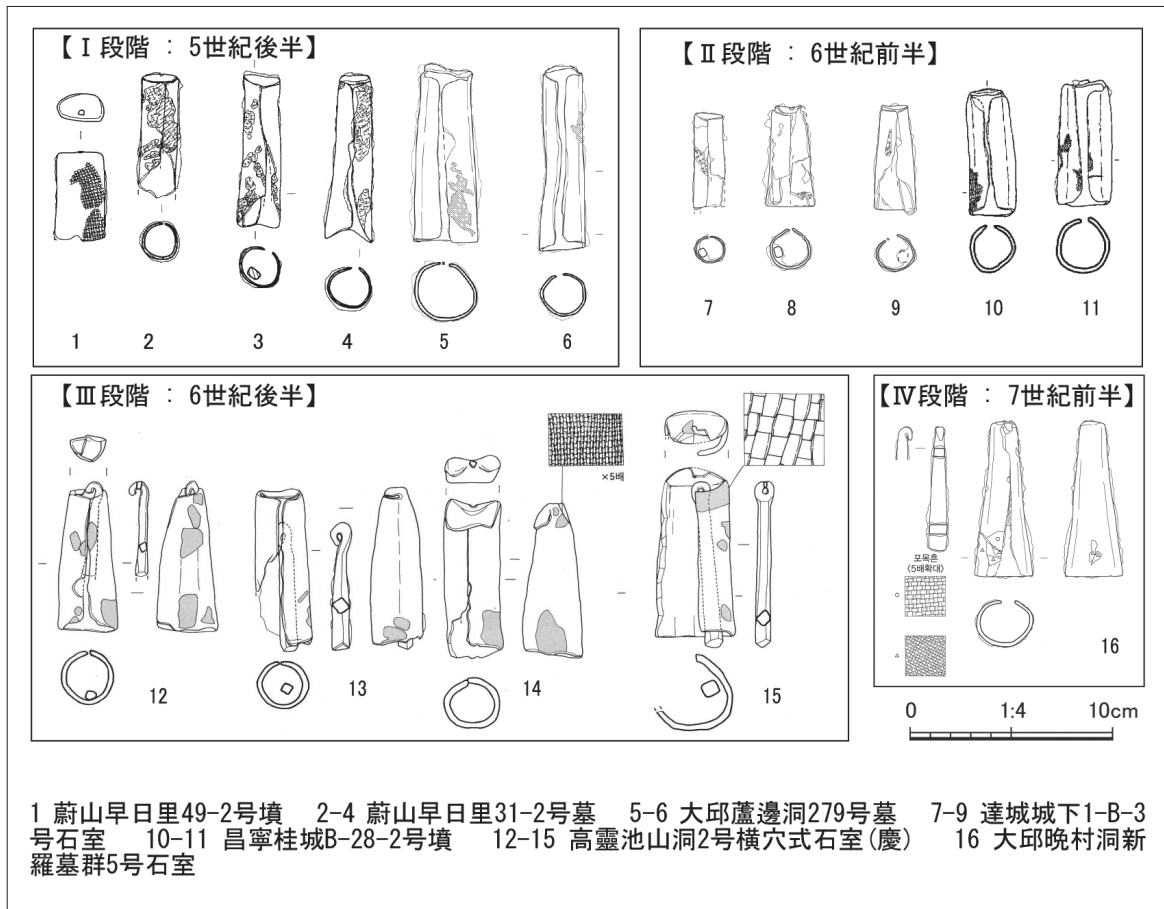


図9 有機質の痕跡がある鉄鐸

る。しかし、共伴遺物と出土状況、性別異形性（하대룡 2019）からみて、これを判断するだけの考古学的な証拠は不十分といわざるを得ない。鉄鐸と魚網錘が共伴するという事実のみをもって被葬者を女性とする見解に対しては、慎重な検討が必要である。

以上のように、埋葬施設の中央から出土し被葬者の腰に装着されていたと判断できる事例や、鐸身の表面に有機質の痕跡が確認される事例は、全 788 点のうちの一部に過ぎないことがわかる。鉄鐸の副葬位置や有機物の痕跡（金東淑 2000）、あるいは埋納された古墳の構造や大きさ（洪濬植 1995）を根拠に、鉄鐸所有者をすべて専門シャーマンとみなす見解は、少なくともこれまでに報告された資料に基づく限り首肯できない。それに、たとえ大半の鉄鐸が被葬者の腰元から布に包まれた状態で出土していたとしても、それがそのまま被葬者の性格を専門シャーマンと推断するに足る考古学的根拠とはならない。共伴遺物から鉄鐸所有者の性別を判断することも容易ではない。

2. 共伴遺物

鉄鐸の用途を検討するために、共伴遺物の分析を試みる。

鉄鐸と共伴する遺物のうち、先学の関心を引いたのは金銅冠であった。新羅社会内における金銅冠所有の意味を意識して、共伴した鉄鐸についても宗教的に特殊な身分者ないし権威者、もしくは祭祀に関連する人物の所有物と評価したのである。しかし、鉄鐸と共伴した金銅冠は現在までに 13 ヶ所でしか出土しておらず、全遺構数の 3%にも及ばない。鍛冶具も同様である。鉄鐸と鍛冶

具が共伴した事例に注目して被葬者が製鉄あるいは鍛冶工人であろうという見解が早くから提起されていたが、鉄鐸と鍛冶具が共伴した事例は現在までに7ヶ所しか確認できない（表2～3）。

つまるところ、これまでに報告された資料に基づく限り、鉄鐸は被葬者の死にともなう副葬専用品の一つであり、場合によっては金銅冠と鍛冶具と一緒に共伴したと判断できる。金銅冠と鍛冶具を根拠に被葬者の性格を推論することは、現在の資料状況からは適切とはいえない。だが、これまで検討されてこなかった以下の共伴遺物に注目すると、特定の鉄鐸の用途に関してはいくつかの可能性をうかがうことができる。

地域	古墳	遺構	鉄鐸	型式	段階	鎌	有	紡	金	鉄	銅	鍛	
大邱	時至路地区	84号	横穴	4	A1	Ⅲ段階	—	—	—	○	—	—	○
金海	右溪里	3号	竖穴	3	A1	Ⅲ段階	—	—	—	—	—	—	○
蔚山	早日里	34号	竖穴	1	B	Ⅱ段階	—	—	—	—	—	—	○
陝川	倉里	B-26号墳	横口	3	A2	—	—	—	○	—	—	—	○
	苧浦	E-5-1号墳	横口	4	A2	Ⅲ段階	—	○	○	—	—	—	○
昌原	盤溪洞	24号	竖穴	3	B	Ⅰ段階	—	—	○	—	—	—	○
密陽	金谷 林川遺跡	A-3-33号	横口	16	A1	Ⅱ段階	—	—	○	○	—	—	○

【凡例】横穴：横穴式石室，横口：横口式石室，竖穴：竖穴式石槨，鎌：鎌形鉄器，有：有刺利器，紡：紡錘車，金：金銅冠，鉄：鉄（青銅）鈴，銅：銅鐸，鍛：鍛冶具

表2 鉄鐸と鍛冶具の共伴

地域	古墳	遺構	鉄鐸	型式	段階	鎌	有	紡	金	鉄	銅	鍛	
大邱	時至路地区	84号	横穴	4	A1	Ⅲ段階	—	—	—	○	—	—	○
	蘆邊洞	473号	竖穴	2	B	Ⅰ段階	—	—	—	○	—	○	—
	佳川洞	2地区9号	竖穴	4	A1/B	Ⅰ段階	○	○	—	○	○	—	—
		5号	竖穴	4	—	Ⅰ段階	○	—	—	○	—	—	—
		139号	竖穴	1	A2	Ⅰ段階	—	○	—	○	—	—	—
	168号 主槨	竖穴	1	B	Ⅱ段階	○	○	—	○	—	—	—	
新西洞	B-6地域 9-2号墓	横口	7	A1	Ⅲ段階	—	—	—	○	—	—	—	
慶山	林堂	造永 1B-6号墓	横穴	3	B	Ⅱ段階	—	○	—	○	—	—	—
蔚山	早日里	35号墳	竖穴	1	A1	Ⅰ段階	—	—	—	○	—	—	—
		49-2号墳	竖穴	3	A1	Ⅰ段階	—	—	—	○	—	—	—
安東	枝洞	2号墳	竖穴	2	A2	Ⅲ段階	—	—	○	○	—	—	—
密陽	金谷 林川遺跡	A-3-33号	横口	16	A1	Ⅱ段階	—	—	○	○	—	—	○
坡州	城洞里	石室	横口	1	A1	Ⅳ段階	—	—	○	○	—	—	—

【凡例】横穴：横穴式石室，横口：横口式石室，竖穴：竖穴式石槨，鎌：鎌形鉄器，有：有刺利器，紡：紡錘車，金：金銅冠，鉄：鉄（青銅）鈴，銅：銅鐸，鍛：鍛冶具

表3 鉄鐸と金銅冠の共伴

1) 儀器

鉄鐸が音を出すための道具であることを考慮すれば、まず儀器である可能性がある。扶安竹幕洞祭祀遺跡と日本の沖ノ島祭祀遺跡から出土した鉄鐸がこの可能性を裏付ける。これと関連して、鉄鐸と共伴した鉄製棒に注目する必要がある³。密陽堤大里Ⅱ-14号墓、蔚山常安洞Ⅰ-23号墓、密陽金谷A-3-27号墓、昌原盤溪洞24号墓、扶安竹幕洞祭祀遺跡（ナ2区北側平坦面）、蔚山藥泗洞北洞遺跡地表採集品、蔚山松亭1号横穴式石室で、鉄製棒とともに数多くの鉄鐸が出土した（表4、図10）。特に、密陽堤大里Ⅱ-14号墓、蔚山松亭1号横穴式石室では鉄製棒周辺に鉄鐸が散乱した状態で出土し、鉄製棒に鉄鐸を吊るして鳴らしたと推定することができる。蔚山常安洞Ⅰ-

3 これまで、儀器（聖林文化財研究院2013、蔚山発展研究院文化センター2015）、サルボ（頭流文化研究院2016）、異形鉄器（昌原大学校博物館2000）、T字形鉄器（東亜細亜文化財研究院2015）などと報告されている。

23号石槨墓出土鉄製棒には鉄鐸を吊るすためとみられる穴も確認される。複数の鉄鐸を一度に鳴らすのに適した構造であるため、鉄製棒と共伴した鉄鐸については儀器であった可能性を想定することができよう。

地域	古墳	遺構	鉄鐸	型式	出土位置	段階	共伴遺物
密陽	金谷 林川遺跡	A-3-27号	横口	16	A1	—	II段階 大刀2, 刀子7, 石突1, 鉄鍬5, 鉄鎌2, 玉多, 菅玉多, 青銅帶金具, 鉸具12, 轡1, 杏葉3, 雲珠2
蔚山	송정	1号	横穴	6	A1	側壁	II段階 刀子6, 杖(儀器)1
慶州	提内里	II-14号	竖穴	15	A1	北短壁	II段階 鉄刀1, 環頭大刀1, 刀子6
蔚山	송정	1号	横穴	6	A1	側壁	II段階 刀子6
	常安堂	I-23号	竖穴	2	A2	中央部	III段階 刀子1
		2		A2	中央部		
昌原	盤溪洞	24号	竖穴	3	B	—	III段階 鉄槌2, 環頭大刀, 金敷, ヤットコ2

【凡例】横穴：横穴式石室，横口：横口式石室，竖穴：竖穴式石槨

表4 鉄製棒と共伴した儀器の可能性のある鉄鐸

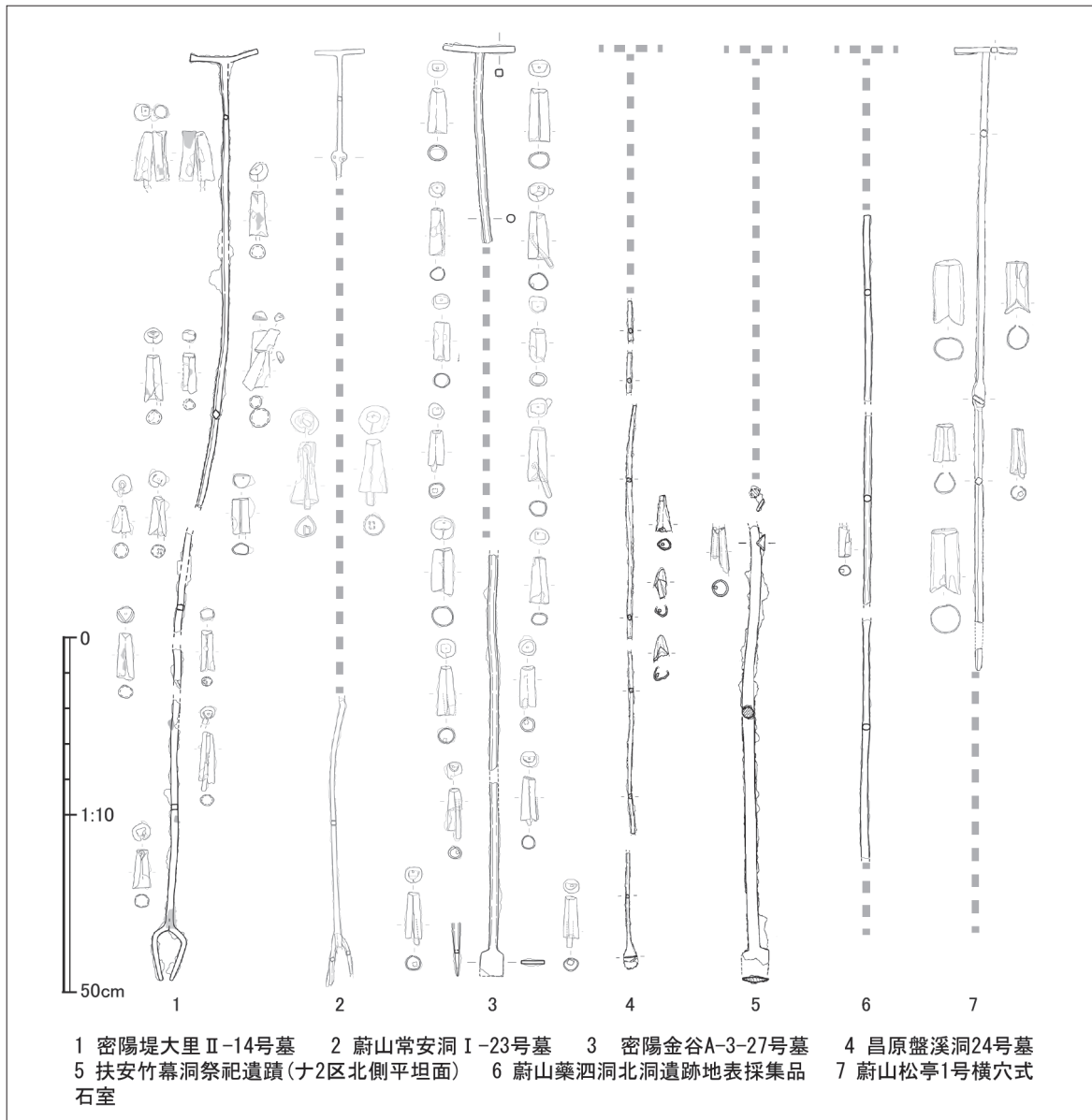


図10 鉄製棒と共伴した儀器の可能性のある鉄鐸

もちろん、鉄鐸を吊るした鉄製棒を、どの場所で、どんな風に使用したかは具体的には不明である。ただ、鉄製棒を田に水を供給する行事に使用するための儀装用道具と理解する見解（김도현 2016）を参考にすれば、灌漑施設の拡充過程で鉄鐸と鉄製棒をセットで使用したものと推定することができる。

2) 牛鈴

馬や牛の首にぶら下げてその位置を知らせる牛鈴として鉄鐸を使用した可能性がある。これと関連して、原三国時代中部地方を中心に増加している両端環棒状鉄器に注目する必要がある。「用途未詳鉄器」または「不明鉄器」として報告された両端環棒状鉄器の用途については、馬の轡、あるいは引手とする見解（忠清南道歴史文化研究院 2011、中央文化財研究院 2018）や、荷物を運んだり車を引いたりする牛馬を効果的に制御するための棒面繫だとする見解（李宙憲 2015）がある。用途の差はあるが、両端環棒状鉄器を馬または牛に関連した器物と認識する点は共通する。また、その盛行時期は3～4世紀であり、主に馬韓地域で流行したものと理解されている。

興味深いのは、牛馬用とみられる両端環棒状鉄器と鉄鐸の相伴関係である。両端環棒状鉄器が出土した遺構では、高い比率で鉄鐸あるいは銅鐸が相伴する（表5、図11）。また、両端環棒状鉄器の登場と消滅の時期が鉄鐸と重なる点も重要である。このように、3～4世紀の中部地域における鉄鐸も、牛馬と関わる轡または面繫として利用された両端環棒状鉄器の側面や、牛馬の首にぶら下げて、牛鈴として鳴らして利用していた可能性を指摘することができる。

ただし、両端環棒状鉄器と相伴した鉄鐸の全長は平均約12cmで、5世紀後半以降の嶺南地方で主に確認される鉄鐸と比べると、その全長が2倍に達する大型のものに属する。しかし、鐸身の製作方法（A1）や舌の製作方法（舌a）、舌の取り付け方法（口）などは、三国時代の嶺南地方のみみられる鉄鐸の製作技術と非常に共通性が高い。3～4世紀代の鉄鐸が牛鈴だとすれば、5世紀後半以降に嶺南地方を中心に出土する鉄鐸も同様の役割を果たした可能性がある⁴。

地域	古墳	遺構	鉄	全 (cm)	完存	型式	出土位置	銅	両	相伴遺物 (金属製品)	
清州	五松	4支店1号	土壇墓	1	12.4	-	-	東短壁	-	○	両端環棒状鉄器3, 鉄鎌1, 板状鉄斧1, 鉄鑿1, 鉄斧1
		4支店2号	土壇墓	1	16	○	A1(?)	中央部	-	-	-
		4支店5号	土壇墓	1	12	-	-	東短壁	-	○	両端環棒状鉄器1
		4支店26号	土壇墓	1	15	○	A1(?)	東短壁	-	○	両端環棒状鉄器2, 環頭刀3, 刀子2, 鉄鉞1, 鉄斧3, 鉄鑿1
		4支店114-1号	土壇墓	1	13.5	○	A1(?)	東短壁	-	○	両端環棒状鉄器2, 鉄鉞4, 鉄斧3, 鉄鎌2, 鉄鑿2
		4支店140号	土壇墓	1	17.4	-	A1(?)	中央部	-	-	鉄斧3
		9支店1号	土壇墓	1	13.6	-	A1(?)	東短壁	-	○	両端環棒状鉄器4, 環頭刀1, 刀子1, 鉄鉞1, 鉄鑿1
		9支店11-1号	土壇墓	1	13.7	-	A1(?)	-	-	-	鉄鎌1, 鉄鉞3, 鉄鑿2
		忠州	金陵洞	78-1号	土壇墓	1	11.6	-	A1(?)	南短壁	-
				2	9	-	A1(?)				
清原	梧倉遺跡	5号	土壇墓	1	7.7	-	A1(?)	南長壁 中央部	○	○	両端環棒状鉄器2, 鉄鉞6, 鉄鑿1, 銅鐸1, 鍛造鉄器2, 鉄鎌1, 玉55
		22-2号	土壇墓	1	11.6	-	A1(?)	中央部	-	-	-
		31号	土壇墓	-	-	-	-	-	○	-	鉄鎌1, 鉄斧1, 鉄鉞1, 銅鐸1
天安	清堂洞	22号	木槨墓	1	10.6	○	A1(?)	木槨外部	-	○	両端環棒状鉄器3, 環頭大刀1, 刀子1, 鉄鎌8, 鉄鉞7, 鉄鑿1, 鉄鎌1, 鉄斧2
牙山	鳴嶽里 밖지브레	3支店馬韓1号	土壇墓	-	-	-	-	-	○	-	馬鐸2
		3支店馬韓5号	土壇墓	1	9.5	○	A1(?)	木槨	-	-	鉄斧2, 鉄鑿1, 鉄鎌1, 馬鐸2, 轡1, 鋌12
慶州	仁旺洞	814-4番地1号	木槨墓	1	10.1	-	A1(?)	北長壁	-	-	鉄斧3, 不明鉄器5, タビ1, 鉄鉞2, 鉄鑿4
				2	10.9	○	A1(?)				
				3	13.7	○	A1(?)				
慶山	林堂	A-1-141号墓	木槨墓	1	8.5	-	A1(?)	西短壁	-	-	槍砲1, 鍛造鉄斧1
				2	7.9	-	A1(?)				

【凡例】鉄：鉄鐸，全：全長，銅：銅鐸，両：両端環棒状鉄器

表5 3～4世紀の中部地域における鉄鐸と相伴した両端環棒状鉄器

4 とはいえ、嶺南地方の鉄鐸の起源を、直ちに原三国時代の中部地域と結びつけるのは、やや早計の感がある。両者には、時間的・空間的な隔たりが大きい。現在、原三国時代の嶺南地方で確認された鉄鐸は、慶州仁旺洞814-4番地1号墓例と慶山林堂A-I-141号墓例のみである。5世紀後半以降、大邱を中心に鉄鐸が突如盛行する背景を検討するには、今後の資料増加を待つ必要がある。

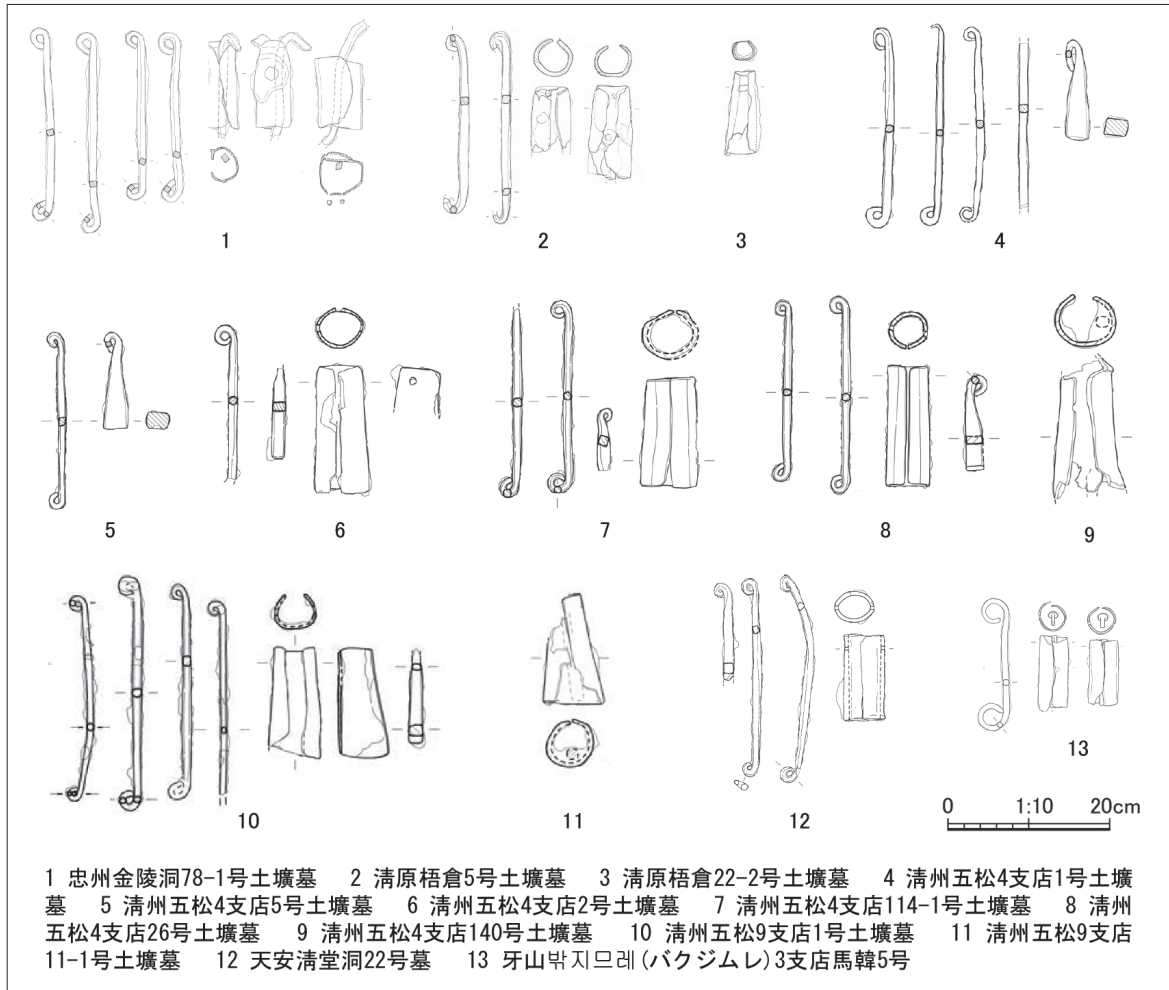


図11 3～4世紀の中部地域における鉄鐸と共伴した両端環棒状鉄器

IV. 鉄鐸の意味

II・III章の分析結果に基づき、IV章では三国時代の鉄鐸がもつ歴史・考古学的意味について考えたい。

1. 新羅の勢力拡張

三国時代の嶺南地方で出土した鉄鐸の大部分は、台脚に2段の透かしをもつ土器と共伴する⁵。いわゆる洛東江以東様式土器、あるいは新羅土器と呼ばれるこの土器の成立時期は、新羅という広域政治体の成立と変化を反映すると理解されており(李熙濬 1997)、共伴する鉄鐸の展開過程についても、すでに指摘されているように、新羅の領域拡張と結び付けて解釈することができる(金東淑 2016)。また、三国時代の鉄鐸の大半が墓から出土することから、副葬専用品の性格を帯び、鉄鐸の副葬行為は類似した埋葬儀礼の共有を意味すると考えられる。

5 鉄鐸と加耶土器が共伴した遺構としては、金海竹谷里 84 号石槨墓、昌寧桂城Ⅱ-40 号墳、昌原盤溪洞 24 号石槨墓、順天竹内里 6 号石槨墓、咸安烏谷里 28 番地 M 2 号墳 1 号石槨墓があげられる。

1) I 段階 (5 世紀後半)

三国時代の鉄鐸がはじめて登場するのは、先述したように新羅の地方である大邱地域であった。特に、大邱を中心に慶山、清道、密陽に鉄鐸が集中する現象が注目されるが、琴湖江、南川、清道川、密陽江につながる水系に沿って類似した埋葬儀礼と鉄器製作技術が共有されており、地域主体の鉄器生産もおこなわれたとみられる。また、I 段階の鉄鐸の分布が洛東江以東地域に限られることから、当時の洛東江が新羅と加耶の国境の役割を果たしていたことがわかる。

I 段階は、新羅が周辺地域を間接支配していた時期と評価される。慶州で製作した金工品をはじめ、洛東江以東様式土器、高塚が、慶州を中心に洛東江以東地域に定型性を帯びつつ拡散するためである(李熙濬 1996)。ただ、鉄鐸の場合、その拡散の主体が慶州勢力ではなく、新羅内の一地方勢力である大邱であったことが興味深い。このような現象を「新羅周辺地域の文化要素」(寺井誠 2019:35)と定義することもできようが、そうすると新羅の認識が慶州だけに限定されるという問題が生じる。鉄鐸と共伴した新羅土器、金銅冠、さらにこれらが出土した高塚を考慮すれば、すでに大邱は新羅化された地域と評価できる。したがって、この時期に登場した鉄鐸は「新羅内の地方勢力の文化要素」と規定することができよう。

一方、洛東江以東地域と琴湖江以南地域にほぼ限定されていた鉄鐸が、蔚珍で出土している点は注目される。5 世紀初頭、すでに高句麗と政治的に深い関係を結んでいた新羅にとって、東海岸は比較的早くから開発された国際交易ルートの一つであった。当時の新羅と高句麗の国際関係を背景に、東海岸沿岸にも鉄鐸が副葬されたのであろう。

2) II 段階 (6 世紀前半)

最も多くの鉄鐸が製作された II 段階には、洛東江以東地域を越えて、金泉、漆谷、亀尾、軍威、義城、安東など洛東江中・上流地域まで鉄鐸の分布範囲が広がる。特に、I 段階には 1 点しか確認されなかった慶州地域で鉄鐸が急増する。このことは、新羅の中央である慶州で地方の埋葬儀礼が受け入れられたことを意味する。慶州皇城洞 3-A-32 号墳、慶州皇南洞 106-3 番地 4 号墳、慶州東山里 99 号墓、慶山新上里カ II-33 号墳、義城大里里 M49-3 号墳など、慶州で出現して地方へと拡散したと考えられる積石木槨墓に鉄鐸が副葬される現象は、このことを端的に示している。新羅様式土器、金工品、高塚のように、慶州を核として洛東江以東地域に拡散した物質文化のみが存在したわけではなく、横穴式石室のように地方から王京に導入された埋葬儀礼や物質文化も存在していたのであろう。その一つが鉄鐸であった。

II 段階には、鉄鐸の生産および流通に関連した二つの軸が確認される。第 1 の軸は、先に指摘した大邱-慶山-清道-密陽の軸である。I 段階に引き続き、多くの鉄鐸が水系に沿って生産・流通・廃棄されたとみられる。第 2 の軸は浦項-慶州-蔚州-梁山-釜山を結ぶ軸である。兄山江や梁山断層に沿って鉄鐸が生産・流通されたようである。

一方、宜寧、陝川、金海、固城など、洛東江以西地域でも鉄鐸の出現頻度が増加するが、以東地域に比べるとまだごく少数に過ぎない。少なくとも鉄鐸という器物に限定して考えれば、II 段階においても洛東江は新羅と加耶の国境としての役割を維持していたとみなすことができよう。

3) III 段階 (6 世紀後半)

II 段階まで洛東江以東地域に限定されていた鉄鐸は、III 段階になると、数量は減少するものの分布範囲はかえって拡大する。華城や驪州などの中部地方をはじめ、大加耶の中心である高霊、金官

加耶の中心である金海で多数の鉄鐸が確認されるようになるが、この現象は、この時期における新羅の勢力拡張と決して無関係ではなさそうである。553年、百済への奇襲攻撃で奪取した新州で出土した鉄鐸は、真興王による中国との交通路確保を目的とした漢江流域への進出過程を反映している。新羅の一地方からはじまった埋葬儀礼が、漢江流域まで広がった。

また、Ⅲ段階に大邱に次いで多くの鉄鐸が出土した高霊（25点）と金海（18点）も、漢江進出のあとすぐにおこなわれた加耶中心地の攻略という新羅の勢力拡張と関連づけて解釈することができよう。

4) Ⅳ段階（7世紀前半）

Ⅳ段階（7世紀前半）に入ると、大邱と坡州で少数の鉄鐸が確認されるだけになる。7世紀前半以降、鉄鐸はあまり盛行しなかった可能性が高い。ただ、これはあくまでも鉄鐸という儀器または牛馬用器物を副葬する埋葬儀礼の中止を意味するだけで、鉄鐸を製作する行為そのもの中止を意味するわけではない。華城梅松野牧里8号住居から出土した鉄鐸の存在を評価すると、朝鮮時代まで鉄鐸がつくられ続けていたことは確かといえる。

2. 新羅地方の鉄器生産と流通

Ⅳ章1節で述べたように、Ⅰ段階には大邱を中心に慶山、清道、密陽で多くの鉄鐸が確認され、地方でも主体的な鉄器の製作がおこなわれていたと推論した。このような見解を裏付ける資料が、鎌形鉄器と有刺利器である⁶。両端の仕上げ方法と刃の方向からいくつかの型式に分類（金銀珠2006）できる鎌形鉄器は、小型の有刺利器、鉄鐸と共伴することが多く、興味深い。

鉄鐸、有刺利器、鎌形鉄器がセットで埋納された古墳は、大邱時至古墳群、盧邊洞古墳群、慶山林堂遺跡など、主に大邱と慶山一帯で確認され、Ⅰ段階からⅢ段階まで続く（表6、図12）。鎌形鉄器は密陽新安遺跡からも出土することを考慮すると、琴湖江、南川、清道川、密陽江水系につながる大邱、慶山、密陽の地域集団が鉄器の生産と流通を担当しており、そうした技術者のネットワークが当時すでに形成されていたと考えられる。すでに指摘されているように、鉄鐸が盛行した頃には、洛東江以東地域で地域主導の鉄器生産がおこなわれており（金東淑2000）、その製作の中心地は、現在までに報告された資料からみて、大邱地域であった可能性が高い。

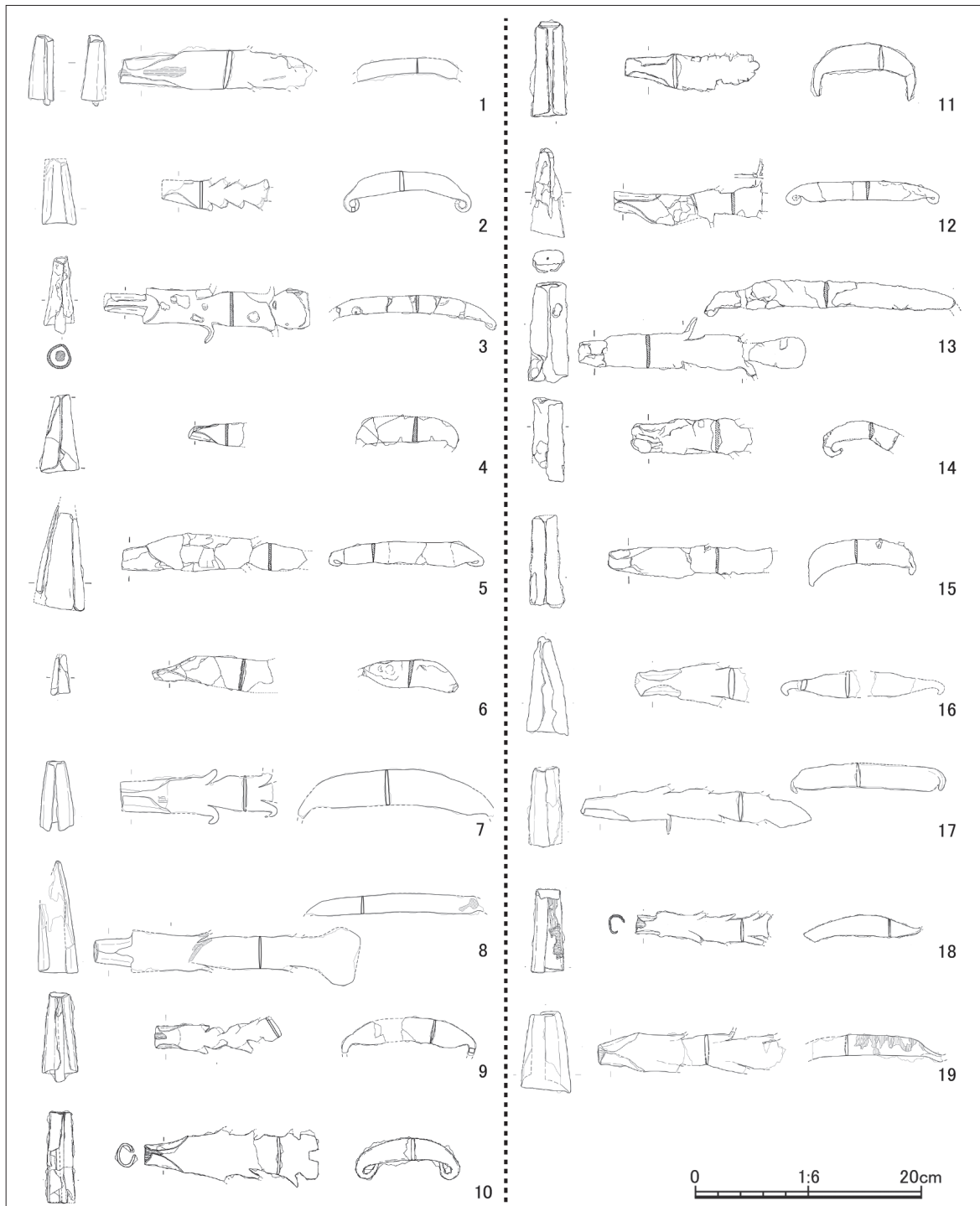
一方、鐸身を半分折り曲げて成形するC式鉄鐸や、鐸身に穴を開けた特殊な形態の鉄鐸も、大邱、蔚山、順天、務安、蔚珍、軍威、密陽など、韓半島全域で確認できる。このような特殊な形態の鉄鐸の分布様相についても、地方の鉄鐸生産と関連づけて解釈できると考える（表7、図13）。

6 鎌形鉄器の用途を儀器（召甬成2008、金銀珠2006）とする見解がある。具体的な用途と使用法は明らかでなく、今後の課題とするほかない。ただし、両先端を丸く作るのは、中部地域の鉄鐸と共伴する両端環棒状鉄器と類似しており興味深い。漠然とした推定ではあるが、大邱地域において鉄鐸とセットで出土する鎌形鉄器も、牛馬用として使用されたものであった可能性もあるだろう。一方、麻立干期の有刺利器が鉄鐸に変化したとする見解（召甬成2016）があるが、両者が共伴する事例が多いため、時期的な先後関係にあるものと理解するのは難しい。

地域	古墳		遺構	鉄鐸	全長	完存	型式	出土位置	段階	鎌	有	紡	金	鉄	銅	鍛		
大邱	時至路地区	25号墓	竖穴	1	7	○	A1	東短壁	II段階	○	—	—	—	—	—	—		
				2	7.2	○	A1	東短壁										
				3	7.3	○	A1	東短壁										
		57号墓	竖穴	1	7	○	A1	東短壁	II段階	○	—	○	—	—	—	—	—	—
				2	6.5	○	A2	東短壁										
				3	8	○	A2	東短壁										
		79号墓	竖穴	1	8.1	○	A1	中央部	II段階	○	—	○	—	○	—	—	—	—
				2	10.1	○	A1	—										
		97号	竖穴	1	6.3	○	A1	北短壁	II段階	○	○	○	—	—	—	—	—	—
				2	5.8	○	A1	北短壁										
	3			6.4	○	A1	北短壁											
	4			5.1	—	—	北短壁											
	120号	竖穴	1	11.6	○	A2	南短壁	II段階	○	—	—	—	○	—	—	—		
	13号	横穴	1	7.4	—	—	1次屍床台	III段階	○	○	—	—	—	—	—	—		
	43号	横穴	1	7.7	—	—	1次屍床台	IV段階	○	○	○	—	○	—	—	—	—	
			2	8	—	—	1次屍床台											
			3	5.7	—	—	1次屍床台											
	65号	横穴	1	5.7	○	A1	屍床台	III段階	○	○	—	—	—	—	—	—	—	
			2	7	○	A1	屍床台											
			3	6.8	○	A2	屍床台											
			4	8.7	○	A1	屍床台											
	時至路の文化遺跡	I D-44号墓	竖穴	1	6.8	○	B	南短壁	I段階	○	○	—	—	—	—	—	—	
				2	6.5	○	B	南短壁										
				3	4.2	○	B(?)	南短壁										
		I D-71号墓	竖穴	1	4.6	○	A1	南短壁	I段階	○	○	—	—	—	—	—	—	
				2	6.9	○	B	南短壁										
		I D-121号墓	竖穴	1	9.3	○	A2	南短壁	I段階	○	○	—	—	—	—	—		
		I D-154号墓	竖穴	1	3.7	○	B	南短壁	I段階	○	○	—	—	—	—	—		
		I D-292号墓	竖穴	1	7.6	○	B	南西短壁	I段階	○	○	—	—	—	—	—	—	—
				2	6.4	○	A1	南西短壁										
				3	7.2	○	B	南西短壁										
		II N-10号墓	横口	1	5.9	○	A1	南短壁	III段階	○	○	—	—	—	—	—	—	—
				2	7.7	○	A1	南短壁										
				3	7.6	○	A1	南短壁										
				4	4.2	—	—	南短壁										
	5			7.25	○	A1	南短壁											
	6			5.5	—	—	南短壁											
	II N-21号墓	横口	1	7.3	○	A1	中央部	III段階	○	○	—	—	—	—	—			
	時至路92-6号墳	竖穴	1	8.8	○	A1	南短壁	I段階	○	○	—	—	—	—	—			
	葦邊洞	57号	竖穴	1	6.3	○	B	東短壁	I段階	○	○	—	—	—	—	—	—	
				2	4.1	○	A1(?)	南短壁										
		189号	竖穴	1	4.1	○	B	南短壁	—	○	—	—	—	—	—	—	—	
	3			4.1	—	B	南短壁											
	683号	竖穴	1	10	○	B	南短壁(屍床石)	I段階	○	○	—	—	—	—	—			
	旭水洞	カ-7号墓	竖穴	1	8.1	○	A1	中央部	I段階	○	○	○	—	—	—	—	—	
				2	8	○	A1	中央部										
	カ-29号墓	横穴	1	8.2	○	A1	北東隅	III段階	○	○	○	—	—	—	—			
	旭水洞364-3番地遺跡	1号	横穴	1	9	○	A2	屍床石	III段階	○	○	—	—	—	—			
	西邊洞	19号	竖穴	1	7.1	—	A1	冢東短壁	II段階	○	—	○	—	—	—	—	—	
				2	7.2	—	A1	冢東短壁										
	佳川洞	2地区9号	竖穴	1	6.1	—	B	東短壁	I段階	○	○	—	○	○	—	—	—	
				2	6.2	○	A1	東短壁										
				3	6.2	○	A1	東短壁										
				4	7.5	○	A1	東短壁										
		5号	竖穴	1	5.5	—	—	中央部	I段階	○	—	—	○	—	—	—	—	
				2	6.5	—	B	中央部										
				3	7.6	—	—	中央部										
				4	7.8	—	B	中央部										
		94号	竖穴	1	7.3	○	A2	南短壁	I段階	○	○	○	—	—	—			
		168号主槨	竖穴	1	8.8	○	B	東短壁	II段階	○	○	—	○	—	—			
		180号	竖穴	1	6.8	○	A1	東短壁	II段階	○	○	—	—	—	—	—	—	
	2			7.4	○	A1	東短壁											
	3			8.3	○	A1	東短壁											
	4			7.9	○	A1	東短壁											
	201号	竖穴	1	9.1	○	A1	東短壁	I段階	○	○	—	—	—	—	—			
			2	8.2	○	A1	東短壁											
	永川 清亭里	III-11-2号	竖穴	1	5.8	○	A1	南短壁	II段階	○	—	—	—	—	—	—	—	
				2	8.1	○	A2	南短壁										
	高靈 池山洞	2号	横口	1	12.7	○	A1	—	III段階	○	—	—	—	○	—			

【凡例】横穴：横穴式石室，横口：横口式石室，竖穴：竖穴式石槨，鎌：鎌形鉄器，有：有刺利器，紡：紡錘車，金：金銅冠，鉄：鉄(青銅)鈴，銅：銅鐸，鍛：鍛治具

表6 鉄鐸・鎌形鉄器と有刺利器の共伴



1 大邱時至97号墓 2 大邱時至43号墓 3 大邱時至文化遺跡 I D-44号墳 4 大邱時至文化遺跡 I D-71号墳 5 大邱時至文化遺跡 I D-121号墳 6 大邱時至文化遺跡 I D-154号墳 7 大邱蘆邊洞57号墓 8 大邱蘆邊洞683号墓 9 大邱旭水洞 364-3番地1号墳 10 大邱旭水洞カ-7号墳 11 大邱旭水洞カ-29号墳 12 大邱時至文化遺跡 I D-292号墳 13 大邱時至92-6号墳 14 大邱時至文化遺跡 II N-21号墓 15 大邱時至文化遺跡 II N-10号墓 16 大邱佳川洞168号墓 17 大邱佳川洞180号墓 18 大邱佳川洞2-9号墓 19 大邱佳川洞94号墓

図12 鉄鐸・鎌形鉄器と有刺利器の共伴

地域	古墳		遺構	鉄鐸	型式	全長	完存	位置	段階	穿孔
咸安	烏谷里 28 番地	M2 号墳 1 号	豎穴	1	特殊形	2.1	○	東短壁	I 段階	—
大邱	佳川洞	114 号	豎穴	1	C	—	—	西短壁	I 段階	—
				2	C	—	—			
				3	C	—	—			
				4	C	—	—			
蔚山	下三政	62 号	豎穴	1	C	9	—	—	I 段階	—
順天	쌍암	4 号	豎穴	2	C	7.5	○	東短壁	—	—
務安	麥浦里	3 号	土	1	C	5.7	○	中央部	II 段階	—
大邱	時至路地区	10 号	横穴	1	A1	8.9	○	周溝	III 段階	○
				2	A1	7.5	○	周溝		○
	佳川洞	69 号	豎穴	1	A1	7.3	○	東短壁	II 段階	○
				2	A1	7	○	東短壁		○
	城下里	1-B-3 号	横口	1	A1	5	○	屍床石	III 段階	○
				2	A1	6.7	○			○
蔚山	處容里	I-ナ-3 号	木	1	A1	5	○	北短壁	II 段階	○

【凡例】 豎穴：豎穴式石槨，土：土壙墓，横穴：横穴式石室，横口：横口式石室，木：木槨墓

表 7 C 式鉄鐸と穴の開いた鉄鐸

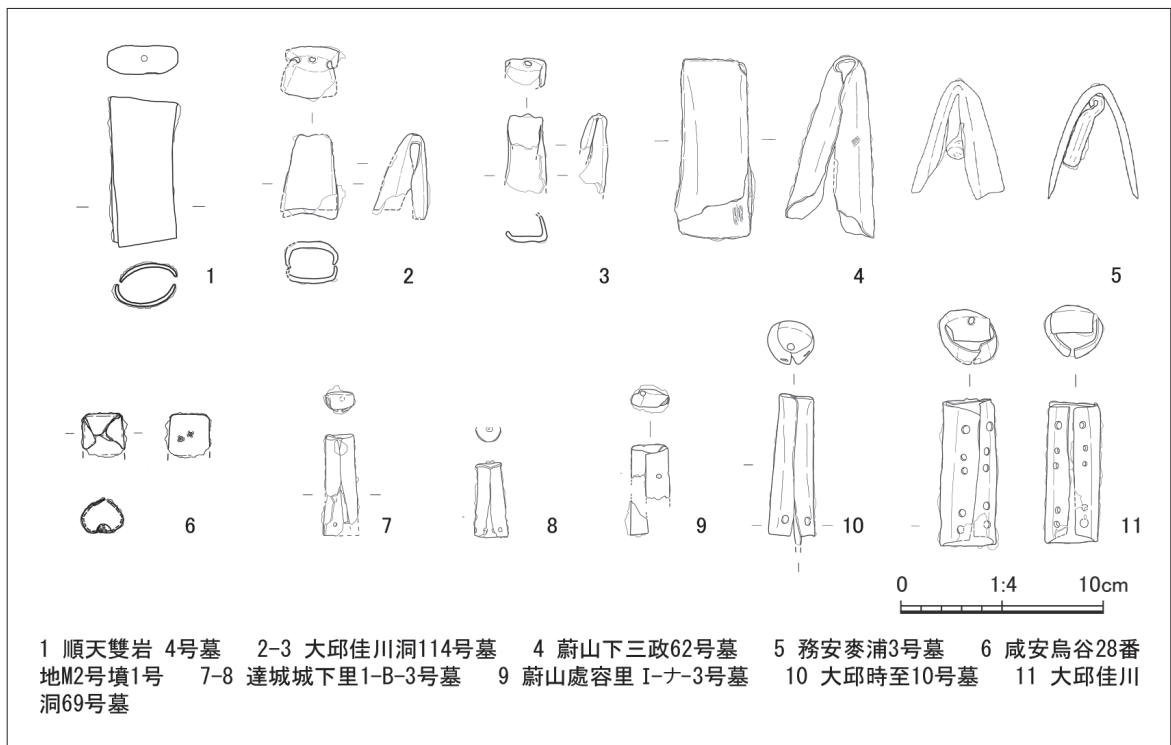


図 13 C 式鉄鐸と穴の開いた鉄鐸

V. 古墳時代の鉄鐸と日韓交渉

韓半島の影響により、古墳時代の日本列島にも鉄鐸が出現する。現在までに130点余りが報告されている。V章では、先学の研究成果（早野浩二2008、寺井誠2019）を参考に、三国時代の鉄鐸と比較しつつ、古墳時代の鉄鐸の様相を整理したい。

1. 古墳時代の鉄鐸

1) 型式と全長

古墳時代の鉄鐸は、すべてB式に該当する。韓半島で確認されるA1・A2式、C式は出土しておらず、対照的である。

表8に、鉄鐸の全長を整理した。全長3～4cmの鉄鐸が多いのが特徴である。三国時代の鉄鐸の平均全長が約7cmであるのに対して、古墳時代の鉄鐸は平均全長4.9cmと、小型であることがわかる（寺井誠2019）。

全長(cm)	数
3	15
4	23
5	21
6	8
7	16
8	5
11	1

表8 古墳時代鉄鐸の全長と数

2) 盛行時期

古墳時代中期から終末期を通して盛行する。中期に70点余り、後期・終末期にも70点余りが確認され、5世紀後半から7世紀前半まで製作された三国時代の鉄鐸と盛行時期が重なる。

3) 分布

古墳時代中期に最も多く鉄鐸が副葬されたのは、九州地域である。福岡県4ヶ所、宮崎県5ヶ所で鉄鐸が確認される。それ以外にも、兵庫県、岡山県、島根県、愛知県、茨城県、群馬県など、日本全国に鉄鐸が点在している。

古墳時代後期・終末期になっても分布範囲に大きな変化はなく、依然として九州地域に多くの鉄鐸が確認される。また、中期には確認できなかった畿内地域にも鉄鐸が登場するのが特徴である。以上のように、日本全国に広く分布する古墳時代の鉄鐸は、大半が嶺南地方に集中する三国時代鉄鐸の様相とは対照的である。

4) 副葬

韓半島三国時代のほとんどの鉄鐸が古墳から出土しているのに対して、古墳時代の鉄鐸は、70%が墓から、残りの30%が墓の周溝、集落、祭祀遺構、竪穴建物跡から出土している（寺井誠2019:32）。

埋葬主体から鉄鐸が出土した事例については、その位置が正確に報告されていないため詳しい分析ができないが、岡山県小池谷1号墳、京都府城谷口2号墳、大分県志津里3号墳では頭部で、兵庫県向山5号墳では足部で鉄鐸が確認され、被葬者が体に装着していたと考えられる例が存在する。

一方、共伴遺物をみると、鍛冶具と鉄鐸が共伴する事例は、岡山県西吉田北1号墳、福岡県カクチガ浦3号墳のみである。鉄鐸が出土した古墳で金銅冠が共伴した事例はない。三国時代の鉄鐸と同様、鉄鐸と鍛冶具、金銅冠の共伴頻度は低い。

2. 日韓交渉

韓半島と日本列島で鉄鐸が出現する時期は、5世紀後半(≒古墳時代中期後半)である。この時期、韓半島では186点、日本列島では70点余りの鉄鐸が確認される。また、鉄鐸が副葬された古墳時代中期の古墳では鍛冶具、砥石など、当時日本列島に定着していなかった韓半島系遺物が共伴する場合もあり、一部の被葬者については渡来人との想定もされている(亀田修一2000)。両地域で確認される鉄鐸の数量だけでなく、共伴遺物からも古墳時代中期に日本列島で出土する鉄鐸は韓半島から伝えられた可能性が高い。鉄鐸が出土した中期古墳の規模が、三国時代の古墳と同様、ほとんど小型墳であること、古墳時代を代表する前方後円墳から鉄鐸が1点も出土していないこと、日本列島内で鉄鐸が在地で生産され流通したと判断できるだけの考古学的な証拠が認められないことがこれを傍証する。

ただし、古墳時代の鉄鐸は、古墳のほか、集落、祭祀遺構、竪穴からも確認されるため、新羅から強い影響を受けたとしても、これを使用する方法については必ずしも新羅と同じではなかったようである。日本の学界では、鉄鐸は古墳時代中期に韓半島から導入された渡来系文化の一要素であり、同時に葬送儀礼に使用した器物であったとの理解が一般的である(村上恭通2004、早野浩二2008、寺井誠2019)。

鉄鐸が日本列島内ではじめて登場する古墳時代中期は、武器、武具、馬具、そのほかの鉄製品類、装身具、土木技術、集落、窯、玉、製塩など、韓半島から大きな影響を受けた「技術革新」(田中史生2002)の時期と評価される。埼玉県稲荷山古墳の銘文鉄剣、熊本県江田船山古墳の銀象嵌鉄刀などの象嵌銘文刀剣からみて、韓半島の渡来系文物を積極的に受け入れた主体は畿内地域の大王権だった可能性が高い。しかし、鉄鐸に限定して考えると、韓半島から鉄鐸をはじめとする鉄器文化を積極的に受け入れた地域は九州であったといえる。大王権が、九州勢力が受容しようとした渡来文化と先進技術を掌握することは容易ではなかったとみられる。

日本列島で鉄鐸が盛行する時期が、古墳時代中期から後期に及んでいることも看過できない。5世紀後半から6世紀にかけての倭の主な交渉相手は、これまで主に百済と大加耶が想定されてきた(박천수2007、高田貫太2014)。しかし、新羅の勢力拡張を象徴する鉄鐸に注目してみると、百済、大加耶とともに、新羅も倭と持続的な交渉を試みたとみなければならないのである。特に、畿内地域に鉄鐸が副葬される6世紀後半以後、その交渉関係は強化されたと考えられるが、これは倭が百済から導入した先進文物を新羅から受け入れようとする倭の動向(박천수2016:116)とも軌を一にしている。また、新羅と倭の交渉航路としては、鉄鐸の分布からみて洛東江下流域—大韓海峡(沖ノ島)—九州—瀬戸内海—畿内を想定することができる。このように、5世紀後半から6世紀前葉まで、九州地域に鉄鐸が集中し続ける現象の歴史的背景には、磐井の乱に象徴される国際情勢を想定することができるだろう。

終わりに

本稿では、近年韓半島、特に嶺南地方を中心に多く出土している鉄鐸に注目した。共伴した土器を基準に鉄鐸の登場と消滅の時期を推定、段階設定や展開過程、製作技術、副葬様相、共伴遺物など多様な観点から鉄鐸を総合的に分析し、その用途と所有者の性格、鉄鐸をめぐる歴史・考古学的意味を検討した。その上で、日韓交渉という観点から古墳時代の鉄鐸についても論じた。このように、最近急増した資料を分析し、これまでに提起された多様な見解を批判的に検討することで、鉄鐸に関する新たな知見を見出すことができたと思う。本稿では分析できなかったが、鉄鈴、銅鈴、銅鐸も、音を出すという点において、基本的に鉄鐸と同様の性質を有する器物であり、また互いに共伴する事例も多いため、その相互関係については今後の研究課題にしたい。

参考文献

日本語

- 高慶秀 2009 「韓国と日本の鉄鐸に関する一考察」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第1号 國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター pp.125-132
- 高田貫太 2014 『古墳時代の日朝関係』吉川弘文館
- 亀田修一 2000 「鉄と渡来人—古墳時代の吉備を対象として—」『福岡大学総合研究所報』第240号 福岡大学総合研究所 pp.165-184
- 大場磐雄 1972 「統鉄鐸考」『信濃』第24巻第4号 信濃史学会
- 藤森栄一 1974 『銅鐸』学生社
- 寺井誠 2018 「朝鮮半島と日本列島の鉄鐸」『日本考古学協会 第84回総会 研究発表要旨』日本考古学協会
- 寺井誠 2019 「朝鮮半島と日本列島の鉄鐸」『渡来文化の故地についての基礎的研究—新羅・加耶の要素を中心として—』平成28～30年度日本学術振興会科学研究費補助金研究成果報告書
- 西幸子 2018 「蔚山地域の馬具生産の可能性」『古文化談叢』第81集 九州古文化研究会
- 田中史生 2002 「渡来人と王権・地域」『倭国と東アジア』日本の時代史2 吉川弘文館
- 早野浩二 2008 「古墳時代の鉄鐸について」『研究紀要』第9号 愛知県埋蔵文化財センター
- 川崎保 2015 「古代信濃の鉄鐸についての一考察」『信濃』第67巻第10号 信濃史学会 pp.23-50
- 村上恭通 2004 「朝鮮半島系遺物を共伴する鍛冶具をめぐって」『東アジアにおける古代鉄鍛冶技術の伝播と展開』平成12年度～平成15年度科学研究費補助金研究(B)(2)研究成果報告書
- 行田裕美 1997 「鉄鐸について」『西吉田北遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告 第58集 津山市教育委員会 pp.101-108

韓国語 (ㄱㄹㅇ順)

- 金東淑 2000 「嶺南地方의 6~7世紀代 墳墓出土 鉄鐸에 관한 研究」『慶北大学校 考古人類学科 20周年 紀念論叢』慶北大学校 人文大学 考古人類学科 pp.267-293
- 김도영 2018 「신라 대장식구의 전개와 의미」『한국고고학』第107輯 韓國考古学会 pp.72-123
- 김도현 2016 「가야의 생업과 제의」『가야고고학개론』진인진
- 김동숙 2016 「제사」『유적과 유물로 본 신라인의 삶과 죽음』신라 천년의 역사와 문화 연구총서 21 경상북도
- 김민철 2012 「V. 고찰」『大邱 佳川洞古墳群Ⅱ -본문 2-』學術調査報告 第202冊 嶺南文化財研究院
- 김용성 2008 「경산 임당고총의 제의와 부장품의 의미」『한국 고대사 속의 경산』대구사학회
- 김용성 2016 「장법과 장송의례」『유적과 유물로 본 신라인의 삶과 죽음』신라 천년의 역사와 문화 연구총서 21 경상북도
- 金銀珠 2006 「신상리 고분군의 鉄器」『慶山 新上里 遺蹟Ⅴ』學術調査報告 第53冊 嶺南大学校博物館
- 金在弘 2001 『新羅 中古期 村制의 成立과 地方社会 構造』서울大学校大学院 文学博士学位論文
- 김혁중 2019 「4~5세기 신라·가야 갑주의 생산 체계」『中央考古研究』第29号 中央文化財研究院
- 박영협 2015 「2. 유물에 대한 검토」『大邱 爐邊洞古墳群Ⅱ(12)』學術調査報告 第220冊 嶺南文化財研究院
- 박천수 2007 『새로 쓰는 고대 한일교섭사』사회평론
- 박천수 2016 『신라와 일본』진인진
- 山本孝文 2007 「印花紋土器의 發生과 系譜에 대한 試論」『嶺南考古学』41号 嶺南考古学会 pp.85-114
- 沈奉謹 1977 「C地区 古墳發掘調査報告」『昌寧桂城古墳群發掘調査報告』慶尚南道
- 윤상덕 2010 「6~7세기 경주지역 신라토기 편년」『한반도 고대문화속의 울릉도 -토기문화-』동북아역사재단 pp.102-

- 尹容鎮·朴淳發 1991 「IV. 考察」『慶州新院里古墳群發掘調査報告書』慶北大學校博物館·慶南大學校博物館
- 이미정 2016 「4. 유물」『대구 서재리 1003 번지 일원 공동주택신축부지 내 달성군 다사읍 서재리 고분군 II』學術調査研究 第 234 冊 慶尚北道文化財研究院
- 이주현 2015 「兩端環棒狀鐵器斷想」『우정의 고고학』故孫明助先生追慕論文集
- 이현정·류진아 2011 「마구와 이식을 통해 본 창녕지역의 금공품 제작 가능성」『慶北大學校 考古人類學科 30 周年 紀念 考古學論叢』慶北大學校 考古人類學科 30 周年 紀念 考古學論叢 刊行委員會 pp.963-994
- 李熙濬 1996 「낙동강 以東 지방 4, 5 세기 고분 자료의 定型性과 그 해석」『4, 5 세기 한일고고학』영남고고학회·구주고고학회 제 2 회 합동고고학대회
- 李熙濬 1997 「新羅考古學 方法論 序說」『韓國考古學報』37 輯 韓國考古學會
- 최대용 2013 「VI. 고찰 (3) 의기류」『慶州 堤內里 新羅墓群』聖林文化財研究院 學術調査報告 第 84 冊
- 최병현 2011 「신라 후기양식토기의 편년」『嶺南考古學』59 号 嶺南考古學會 pp.111-173
- 하대룡 2019 「적석목곽묘 피장자의 성별 재고」『韓國考古學報』第 111 輯 韓國考古學會 pp.298-343
- 洪漣植 1995 「古墳文化를 통해 본 6~7 세기대의 사회변화 -嶺南地方을 중심으로-」『韓國古代史論叢』제 7 집 韓國古代社會研究所
- 洪漣植 2001 『6~7 世紀 新羅古墳 研究』釜山大學校 博士學位論文

—追記—

本稿は以下の論文を翻訳したものである。

김도영 2019 「삼국시대 철탁의 성격과 의미」『韓國考古學報』第 113 輯 韓國考古學會 pp.192-231

資料目録

<https://blog.naver.com/pilseang/221715249603>

文化財と技術 第10号

2021年 9月30日 印刷

2021年10月 1日 発行

編集 鈴木 勉
発行 特定非営利活動法人 工芸文化研究所
所長 鈴木 勉
発行所 特定非営利活動法人 工芸文化研究所
所長 鈴木 勉
東京都台東区根岸5-9-19 (〒110-0003)
印刷 千葉刑務所
千葉県千葉市若葉区貝塚町192 (〒264-8585)